機械じかけの街に今、
一条の光がさし込む！
バルテュス
ティアの輝き

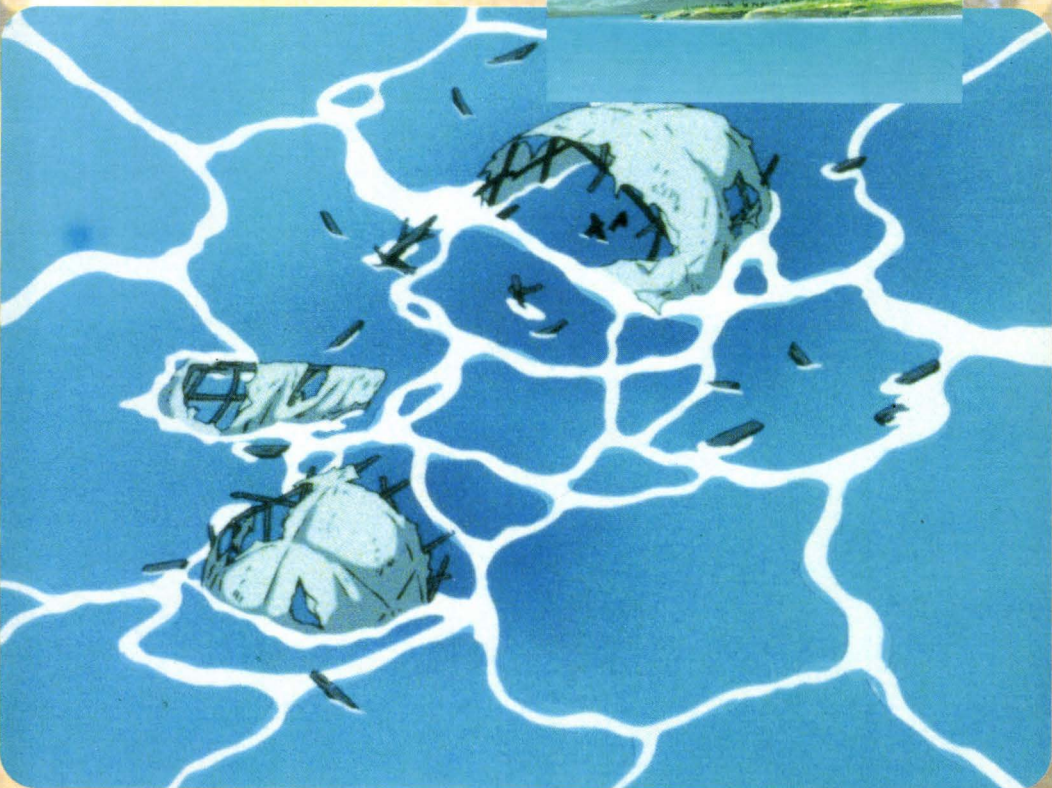
工業都市バルテュスに展開する
アドベンチャーロマン

「永久なる栄えを求めて／人々は鋼の樹の元に集い／歯車を回しつづける／大地と水は枯れ／退廃たる幸福が／人々の心に宿る」

右のような言葉から、巨大な工業都市〃バルテュス〃のストーリーは語りはじめられる。工場王に支配され、人々はロボットのように働かされる都市――それがバルテュス。美少女ティアの身に危険がせまる！　レジスタンスの少年ユードはこれに敢然と立ちあがった……。ユードはティアを救出できるか。彼のレジスタンス運動のゆくえは？　アクションあり、メカあり、エッチシーンありと盛りだくさんのアドベンチャー・ストーリーが展開する。

PROLOGUE

青い空にゆっくり流れる雲。明るく輝く湖面の上を水鳥が横切ってゆく。楽園というのは、きっとこんな風景なのだろう。しかし平和な波のゆらぎを乱すかのように、こなごなになった漂流物がただよっていた。そして美しい砂浜に、ひとりの少年が流れつく。少年は生きているのか、それとも……。漂流物と少年との関係は？

まさに楽園というべき風景のなかを水鳥が１羽横切ってゆく。そのむこうには、陸が見える。

陽光にキラキラと輝く湖面に、バラバラになった漂流物。どうやら小型飛行船のようである。どこから飛んできたものだろうか？　なぜ大破したのだろうか？　いきなり謎が提示される。

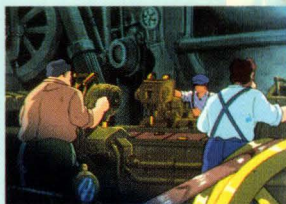
「たいへんだ！」遠くから見守る子どもたち。驚き顔の3人。

「あっ！」砂浜に誰が倒れている。村の子どもたちが駆け寄ってくる。

流れついたのは、まだ幼さの残る少年だった。死んでいるのだろうか。女の子が知らせに走った後も少年は動かない。

回想

絶え間なく響きわたる機械のノイズ。牧歌的な前のシーンとは対照的に、重苦しいムードが全体を支配している。ここは工業都市バルテュス。工場王の下に、まるで人間を歯車のように使って工業化を進め、人々は享楽と退廃を極めている。しかしそんな社会体制を打破しようと、地下に潜伏する革命集団があった。少年はそのメンバーの一員だったのだ。

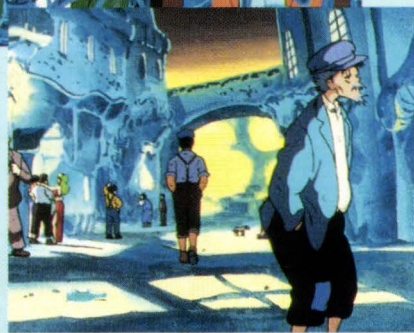
歓楽街。あやしげな灯りや装飾が、今夜も人人を誘う。

機械に囲まれて、機械のように部品を組み立てる作業員たち。

飾り窓のなかでは、娼婦たちの笑い声が絶えることはない。

飾り窓のなかを眺める男たちのうしろを通りすぎる少年。前の場面の少年だ。

酔つ払いがうろつく雑踏を抜ける少年。どんどん人気のないほうへ歩いてゆく。

うす暗がりのなかで、男が何か組み立てている。

男は機械に水晶のような部品を取り付けている。

「アルフォンス！　食料を持ってきたよ」

「なんだ、ユードか……」。男の表情がやわらぐ。

突如、闇空が照らされ警報が街じゅうに鳴り響く。「反逆は許されぬっ！」工場王の姿が浮びあがった。

「ティアをたのむ～っ！」叫ぶアルフォンス。

ユードに対しての砲撃が始まった。さく烈する大砲。

「アルフォンス～！」飛行船で空に浮びあがるユード

炎を吹く飛行船。砲撃にはひとたまりもなかった。

魔都を脱出したのもつかの間、発見されてしまう。

「うわあ――っ!!」飛行船は、煙と炎につつまれてしまった。ユード、絶体絶命の危機！

ティアとの出会い

「うわあ──っ！！」ユードははね起きた。バルテュスから逃れてきたときのことを夢に見て、うなされてしまったのだ。目が醒めたところは、見知らぬ村だった。そしてそこでユードは、自分を介抱してくれた心やさしい美少女に出会う。彼女の名前はティア。彼女は、レジスタンスの同志アルフォンスの妹だった。

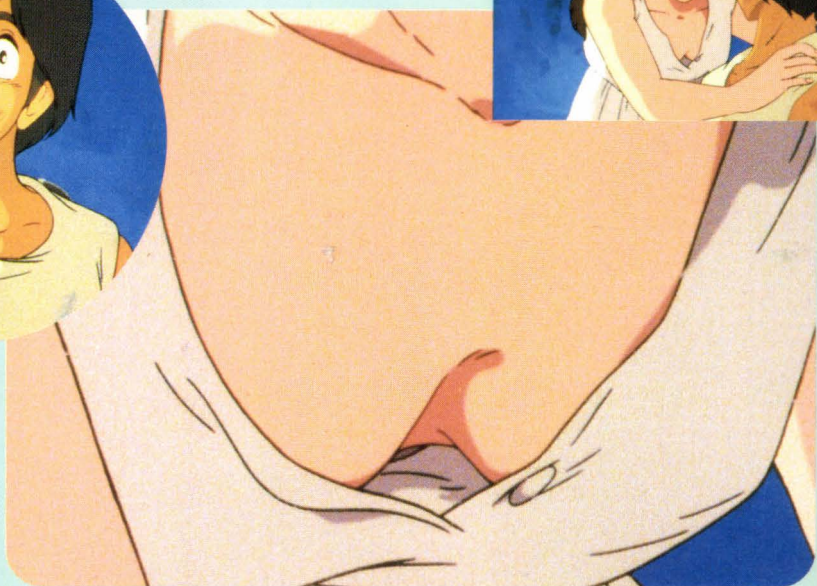
「大丈夫？」心配げにユードを見つめる美少女。

夢にうなされ飛び起きるユード。

ユードの前に現れた少女は？「き、きみは？」

「熱のほうは……？」「あ、いや……」

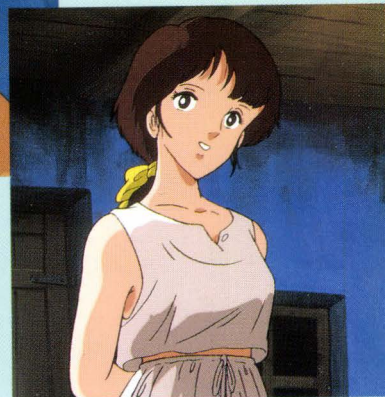
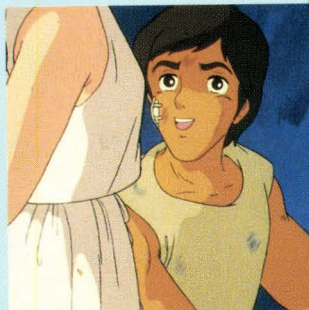
「熱はさがったみたいね、よかった」。ホッとするユード。

ユードは、ハッとして尋ねる「こ、ここは？」

「ルジュテの村よ。食事をどうぞ」

「そうかじゃあ、たどりついたんだ。僕、ユードっていうんだ。キミは？」

「兄さんを知ってるの？　兄さんは元気？」

「ティアよ」やさしくほほえむ少女。

「一緒に反乱を起こしてこの村に逃げようとしたんだ」

「それで……」「途中で離ればなれになってしまったんだ。だから……」

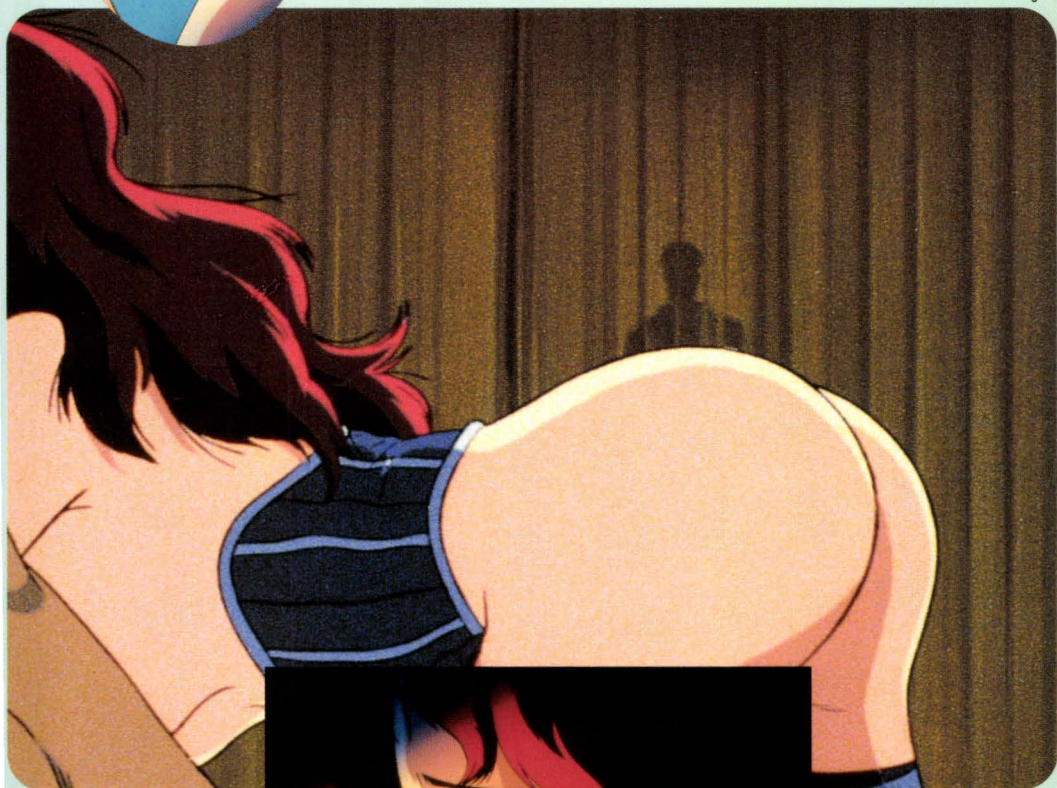
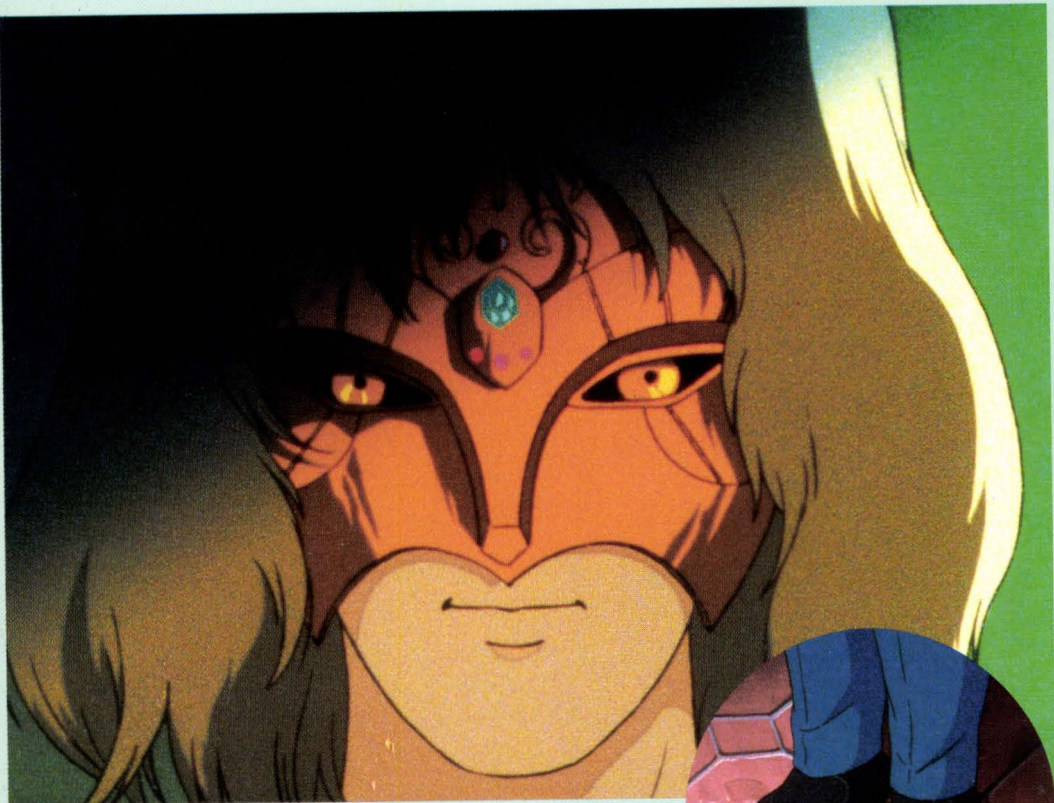
「ティア！じゃあ、きみがアルフォンスの……」

「…そう……」ティアの瞳に涙が光る。

モーロックの居城

場面は、工業都市バルテュス。都市の中心部、街全体を見下ろせる塔の最頂部には、工場王モーロックの寝室がある。そこには、女を抱きながら部下ガビシェールの報告を聞くモーロックの姿があった。蛇のような仮面をつけ、独裁者のようにバルテュスを支配する男、それがモーロックだ。彼は報告を聞きながらも表情ひとつ変えず、女をいたぶり続ける……。

霧の中に巨大な王の塔のシルエットが浮ぶ。

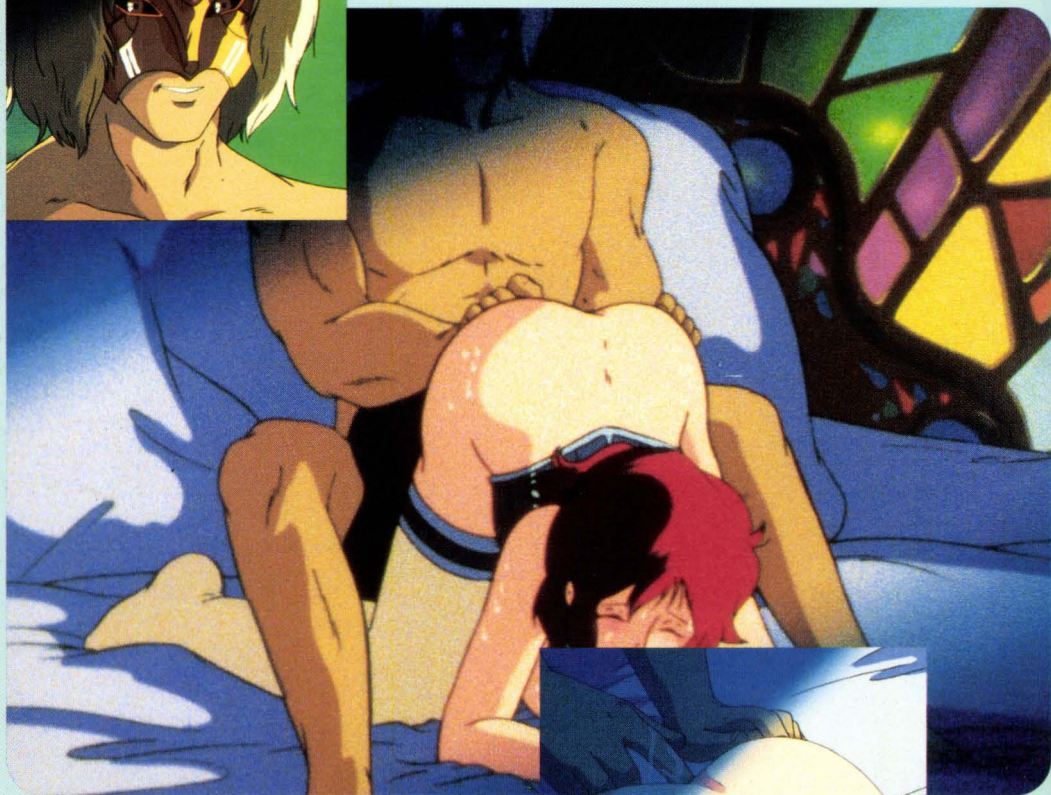
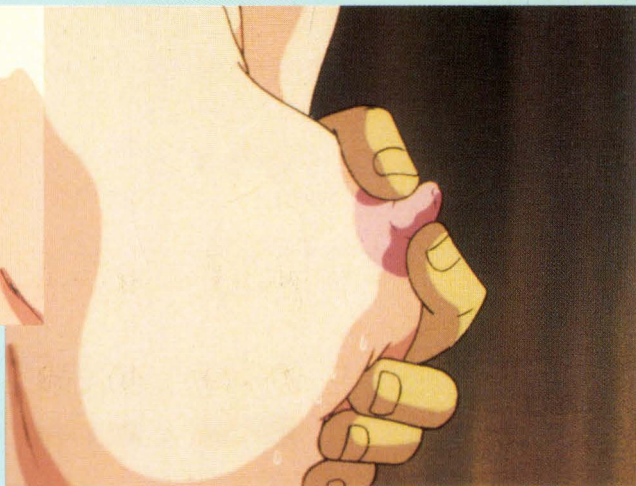
ルジュテの村の対岸にはバルテュスが見える。

怪しげに動く女の体。「閣下！」カーテンの向こうの人影が話しかける。

「ほお、ルジュテか。この私にはむかうとは……。おろか者どもが！　始末しろ！」彼の表情は変わらない。

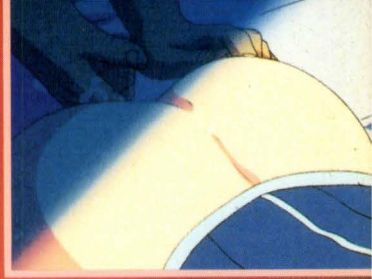
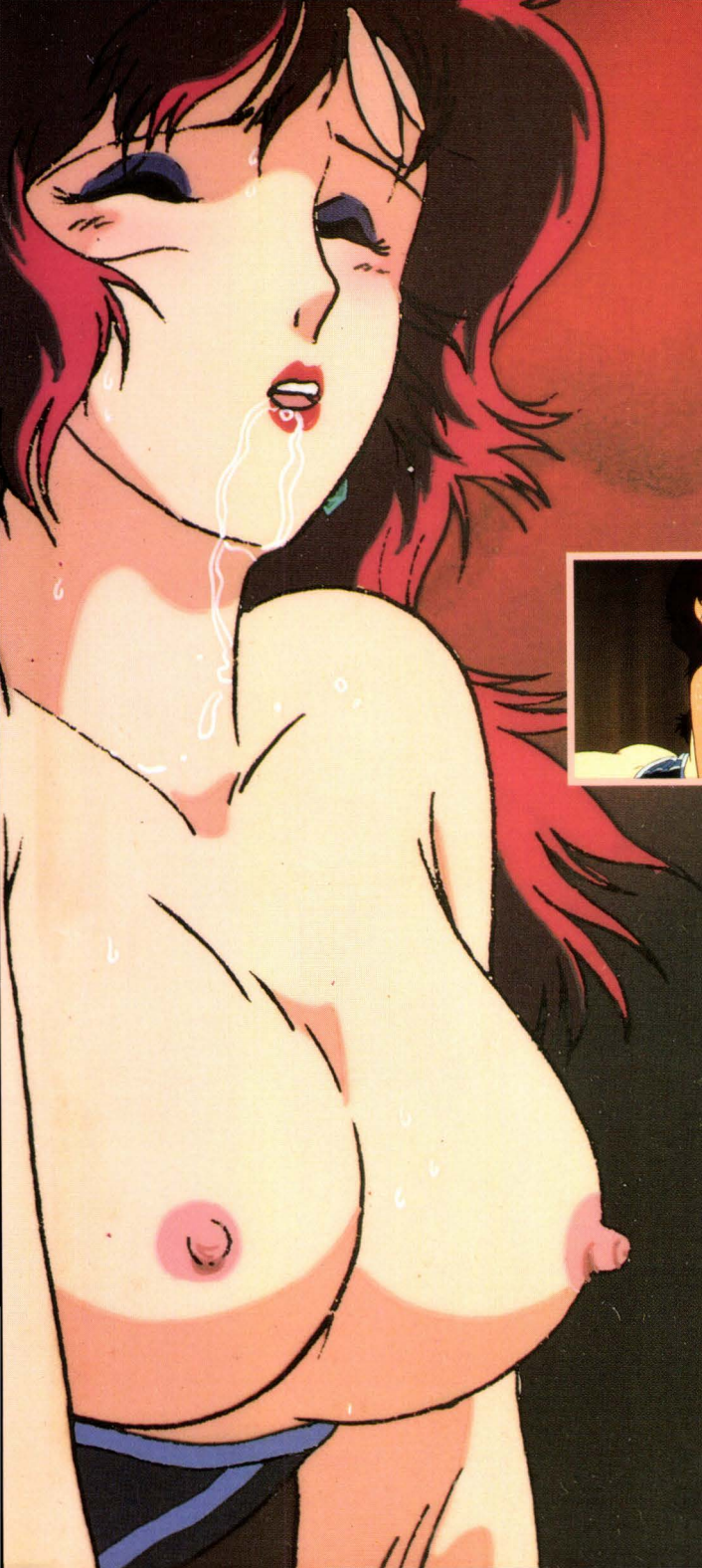
ガビシェールの報告も女にフェラチオをさせたまま聞いている。

ガビシェール「例の者は、東のルジュテという村に逃げこんだ様子です」

ゆっくりと腰を沈めるイヴェット。うっとり……。

しだいに激しく腰を上下しはじめる。イヴェットのあえぎに合わせて、イヤリングや髪の毛が揺れる。

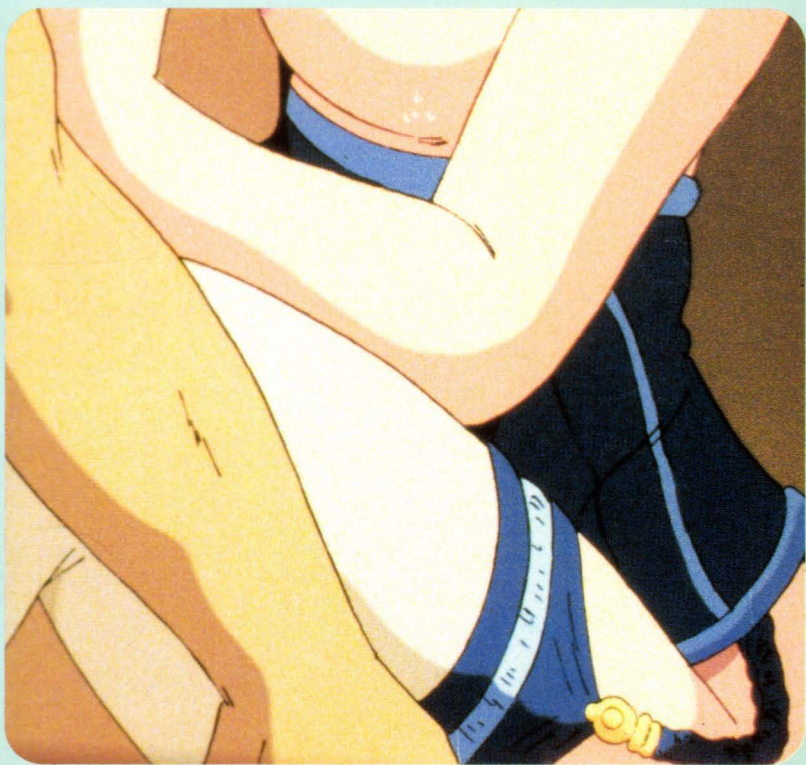
フェラチオからからだを起こして向きを変えるイヴェット。作中では出てこないが、設定では名前があるのだ。

果てたように前に伏したイヴェット
の尻に手をかけるモーロック。

右手を挿入し
刺激しはじめ
る。反応して
動く女の尻。

「ああっ！」モーロックの指づかいに思わず上半身を起こし、悶えるイヴェット。

右手を抜くモーロック。
指に光る女の愛液。

ガクッと崩れて、肩で息
をするイヴェット。

モーロックに抱きついて
乳房を押しつけ…。

左足に手をかけ、抱いた
まま立ち上がる……。

「ああ、モーロック様」しかし嫌そうに顔をそむけるモーロック。

「ええいっ、うっとうしい！」と、平手打ち。

「ああ〜っ！」激しく腰を動かすモーロックとイヴェット。

立ち去ろうとするモーロックにさらに求めるイヴェット。「イヤ、もっと！……」

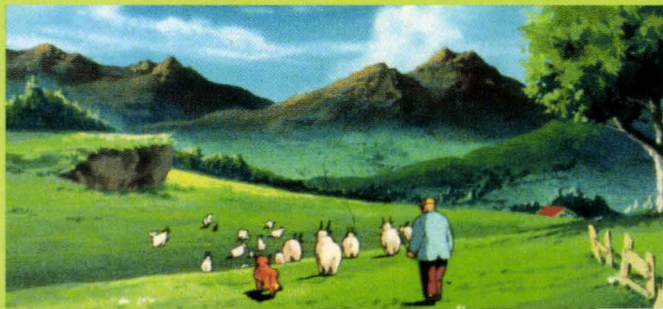
泣き出す彼女を無視して、冷酷に寝室を後にするモーロック。

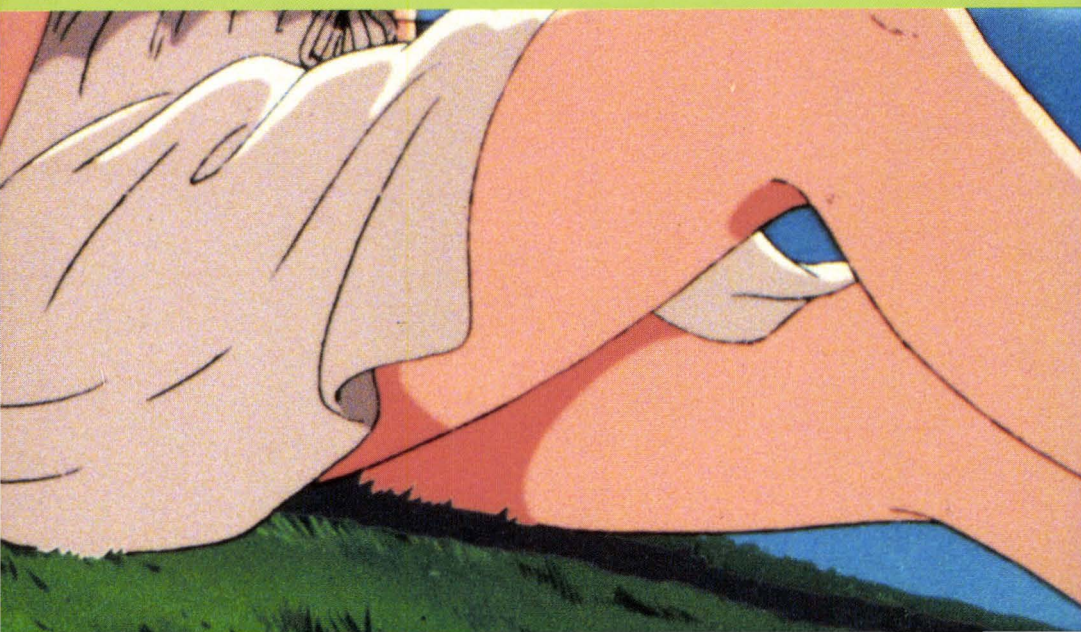
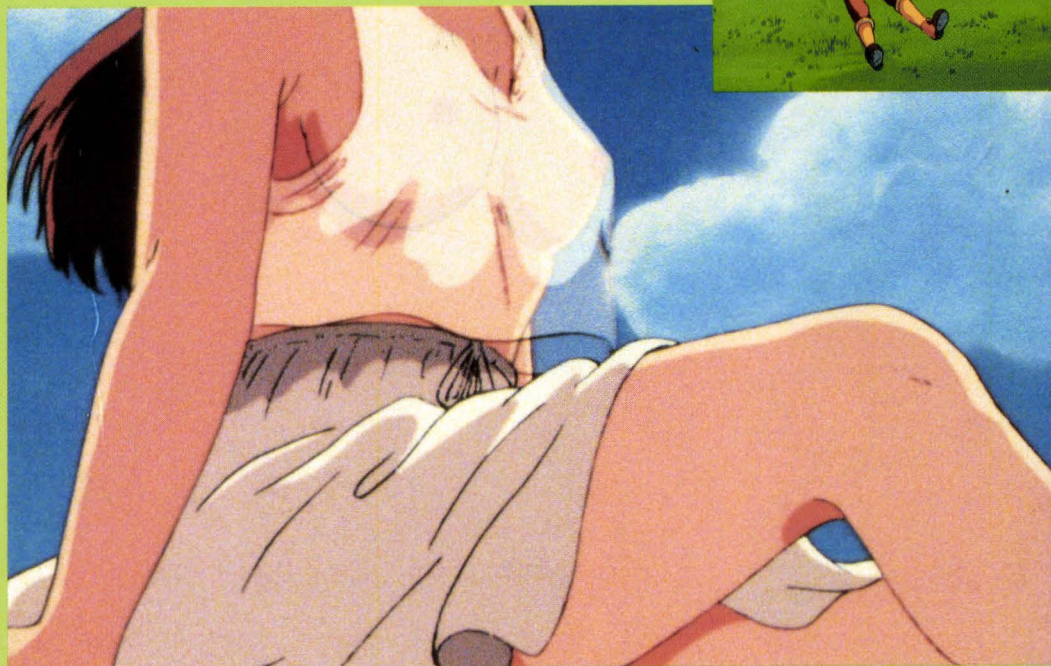
一時の安息

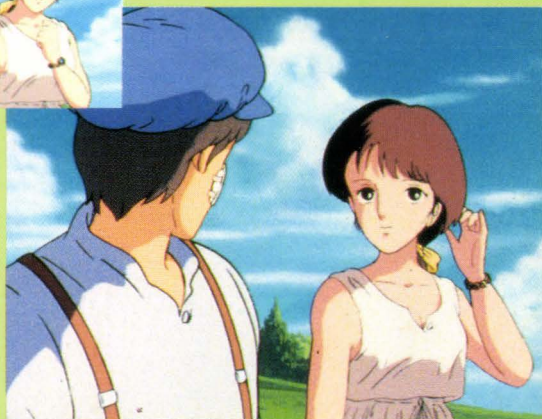
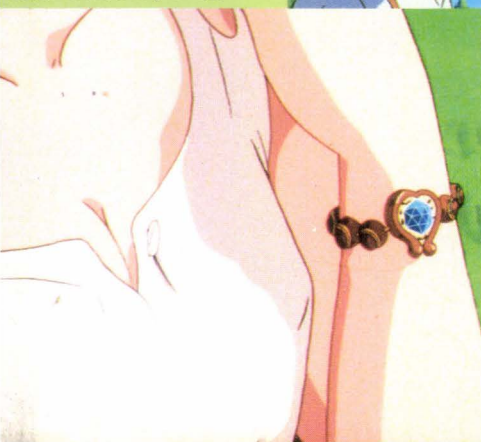
Chapter 5

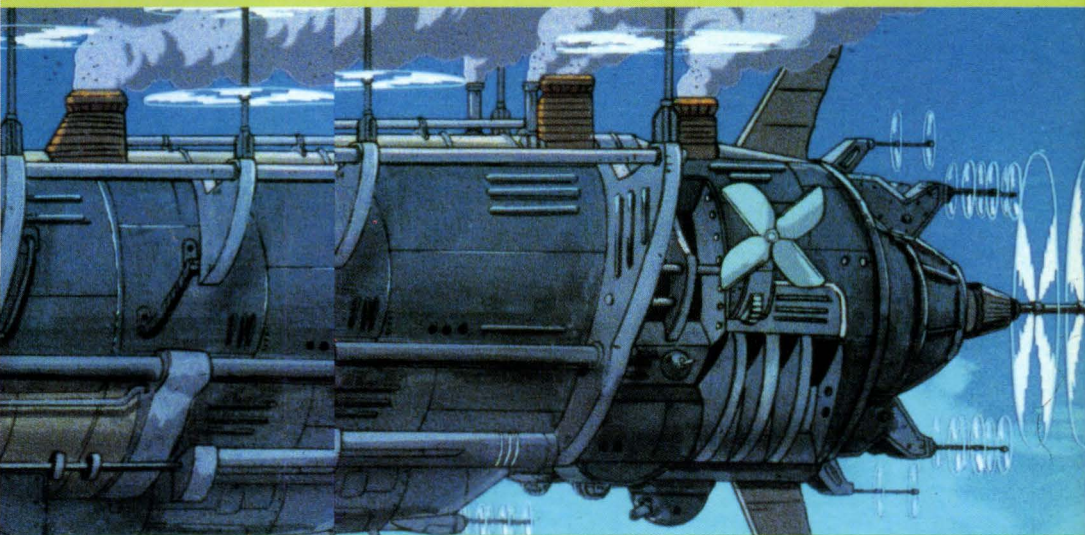
ルジュテの村は、争いごともないおだやかな村だ。バルテュスを脱走したことがモーロックの耳に達したことも知らず、村での平和な日々を過ごすユード。彼のとなりには、同志アルフォンスの妹であり、同じ青く輝く石を身につける少女、ティアがいた。しかし、そんな時間も長くは続かない。追手が放たれたのだ。ふたりの頭上に不気味な巨大飛行船がせまる……。

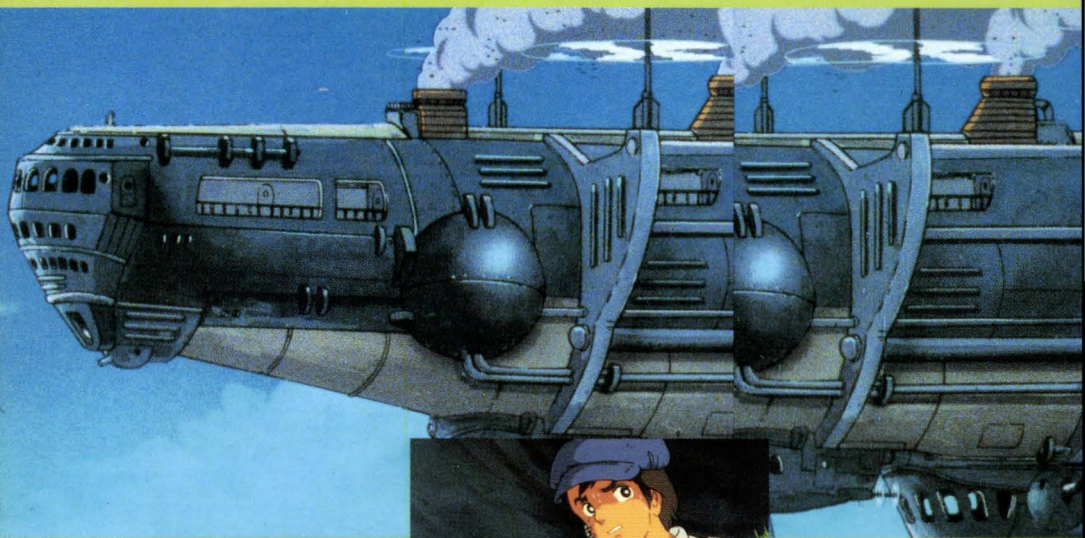
静かなルジュテの村の風景。川べりでつりをする老人。水車も見える。

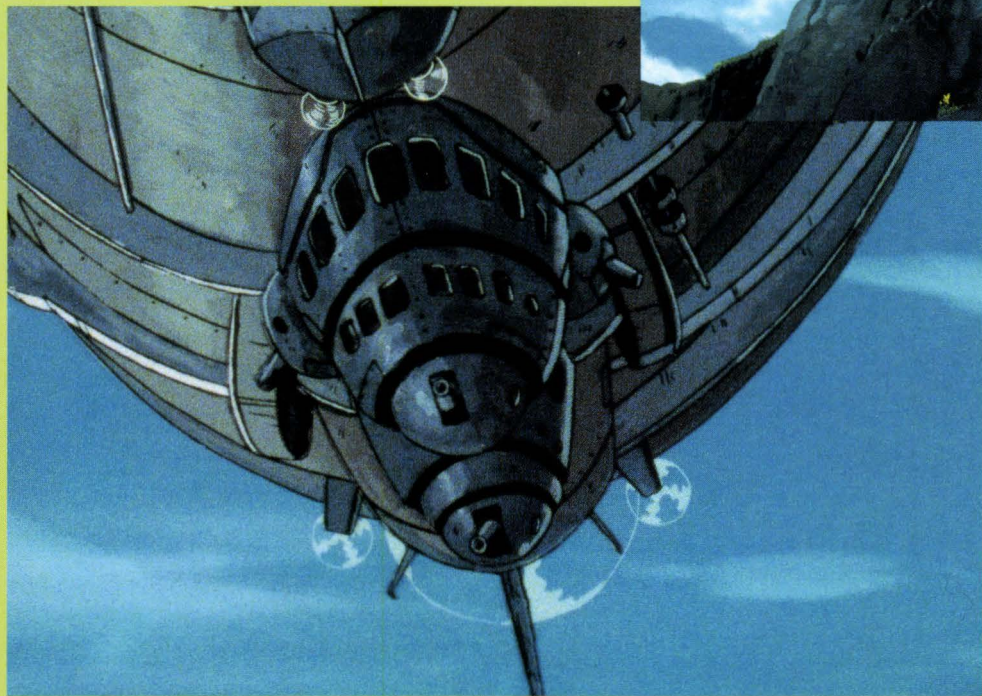
ルジュテの村には動物も多い。無防備に鼻をヒクつかせる動物。

広い牧草地にヤギを追う老人と犬。ルジュテの村は老人と子どもしかいない。

草の上のふたり。バルテュスの出来事が夢のようだ。

気持ちよさそうに、風に吹
かれているティア。彼女は
まるで光のようにまぶしい。
髪に手をやるティア、
左腕に水晶石が光る。
腕輪に気づいて
「おや？」とい
う顔をして‥‥。
「その腕輪は？」
「兄さんからの
贈り物なの」
「ヴィトゥルウィスの水晶っ
ていうの。大昔はこれで機械
を動かしたんですって」

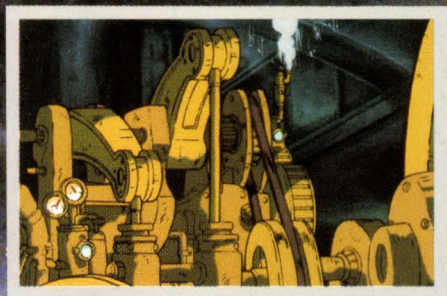
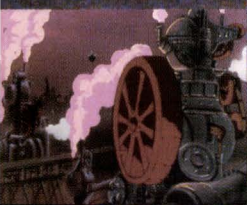
「でも何百年も前に掘りつくしめ、あたしと兄さんしか持っていないの」

水平線のかなたから、しだいに近づいてくる不気味な飛行物体が……。

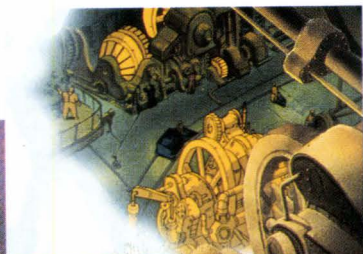
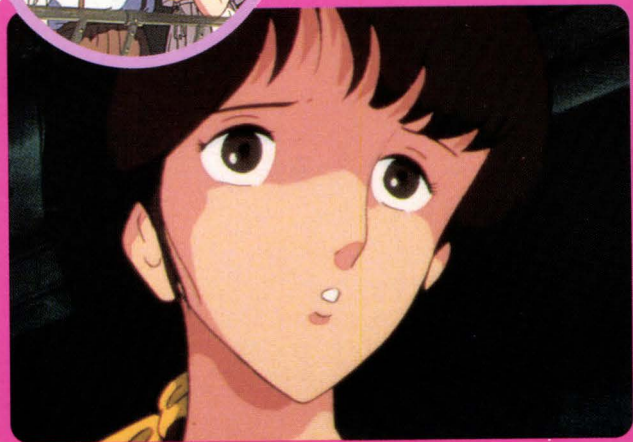
突如、丘のむこうから音を響かせ、姿を現す巨大な飛行船。バルテュスの船だ！

草原を駆け抜けるユードとティア。うしろから迫る飛行船……。

「バルテュスの飛行船だ。
逃げるんだ、ティア！」

画面を横切ってゆく飛行船。
その巨大さがわかる場面。

振りむいたふたりに、飛行船が重くのしかかる……。

突然切り立ったガケに出てしまう。「あっ!」。この先にもう逃げ道はない……。

バルテュス工場内

突然ルジュテの村に出現した飛行船。ユードとティアは、バルテュスに連れていかれてしまう。ふたりがそこで見たものは、空一面を覆うスモッグ。決して止まることのないと思われる工場の機械群。蒸気を吹き出す巨大な溶鉱炉。そして、怪物のような機械に従属する作業員たち。ルジュテの村で生まれ育ったティアにとっては、それらは信じられない異常な光景だった。

休みなく働き続ける工場の歯車、そしてクランク。

巨大な機械群のあいだで、せわしなく働く作業員たち。

「こ、これがハルテュス？」不安げに寄りそうティア。

眼下でくりひろげられる信じられない光景を無言で見つめるティア。

王の間

Chapter 7

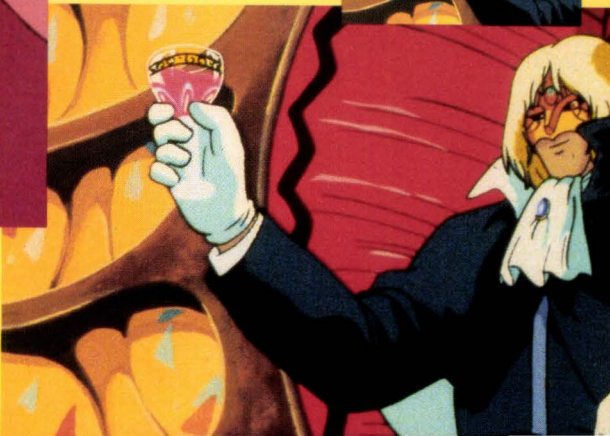
ティアはひとりだけ、居城内にある王の間に通される。そこで彼女が見たものは、金色の仮面をつけた独裁者モーロックの姿だった。「ようこそ、わがバルテュスへ」。兄さんを返して、と叫ぶティア。しかしその要求は無視され、モーロックの私室へと連れていかれてしまう……。

そびえたつ塔。先端はスモッグの中。

雪の上のモーロックの居城。

「きみのような娘が、まだあの村にいたとはね……」

部下にはさまれ、王の間に連れてこられるティア。

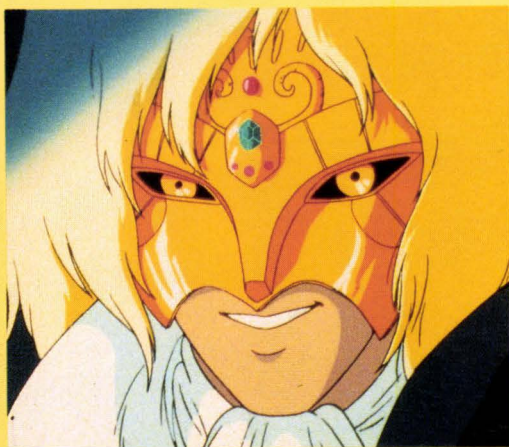
モーロック「ようこそ、わがバルテュスへ」

「あなたね　兄さんや村の人を連れ去ったのは！」

不気味な装飾の玉座にすわり、ティアを見下ろす。

ガチャン！　砕けるワイングラス。「気の強い娘だ。気にいった」

「皆、望んでバルテュスの民となったのだ」「みんなを返して！」叫ぶティア。

「連れていけ！」「いや～っ！　はなしてっ！」。ティアの腕をつかむ部下。必死で抵抗するティア。

「嘘だわ！」「嘘だと!?　このバルテュスでは、働けば働いただけの金と快楽を得ることができるのだ！」

ティア「そんなのいらないわっ！　村へ帰して」

いやらしい口元。ティアをどうしようというのか？

牢獄のユード

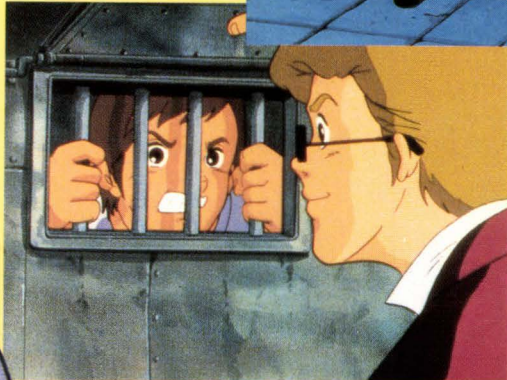
Chapter 8

一方、ティアと離ればなれになってしまったユードは、薄暗い牢獄に監禁されてしまった。あわてて鉄格子に飛びつくが、重たい金属音が牢獄にこだまするだけ……。ティアは、アルフォンスはどうなったのだろう？　落胆するユード。…と、そのとき、ナイフで石を削る音がする。そして、足元の石畳が持ち上がった！

鉄のとびらが開かれ、石畳が明るく照らされる。

鉄格子の窓は非情に閉じられた。上からもれる光…。

「わあっ！」そこに突き飛ばされるユード。

「くそ〜っ！」怒ってユードは飛びかかってゆく。

「ティアをどこへ連れてった」
鉄格子をつかみかかるユード。

ふとそのとき、ナイフで石を削る音が聞える。

足元の石畳からの音のよう。ナイフの先が飛び出る。

ナイフが石を削っていたかと思うと石が持ち上がった。

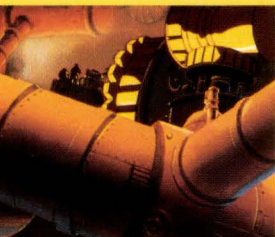
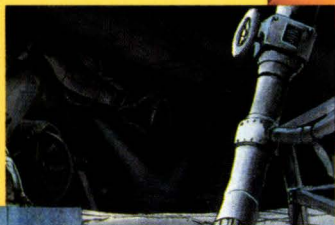
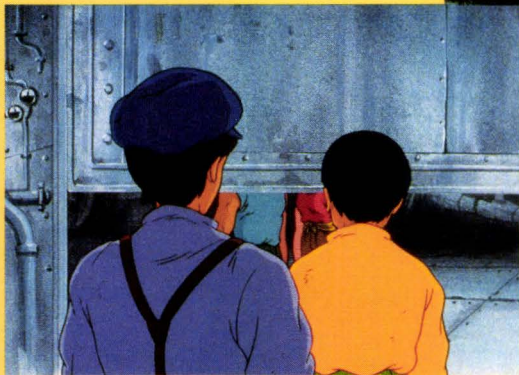
「？？？」不思議そうに穴をのぞいてしまう。

「しっ、静かに！」急に手が伸びてきて口を押さえられてしまった。

「リム！」穴の中からひょいと顔をつき出す少年。仲間だ！

レジスタンスのアジト Chapter 9

牢獄を脱出したユードとリムは、動き続ける工場を地下へ地下へと下り、廃墟と化した工場の前に出る。そこは彼らのアジトだった。ユードはそこで再び同志たちと再会するが、アルフォンスの姿はなかった。驚いて部屋を飛び出すユード。残った仲間たちは、革命の決起を決意する。

のぞき窓が開いて、リムの顔を確認する。「リムか、いま開ける」

ユードとリムは、絶え間なく動き続ける工場群を下へ下へと下ってゆく。

鉄の壁がゆっくりあがってゆく。奥に人かげ。

さらに地下の廃墟と化した工場のなかにレジスタンスのアジトがあった。鉄の壁をたたくリム。

「シリュグ！ パム！」「無事でよかった」再会を喜ぶレジスタンスの同志たち。

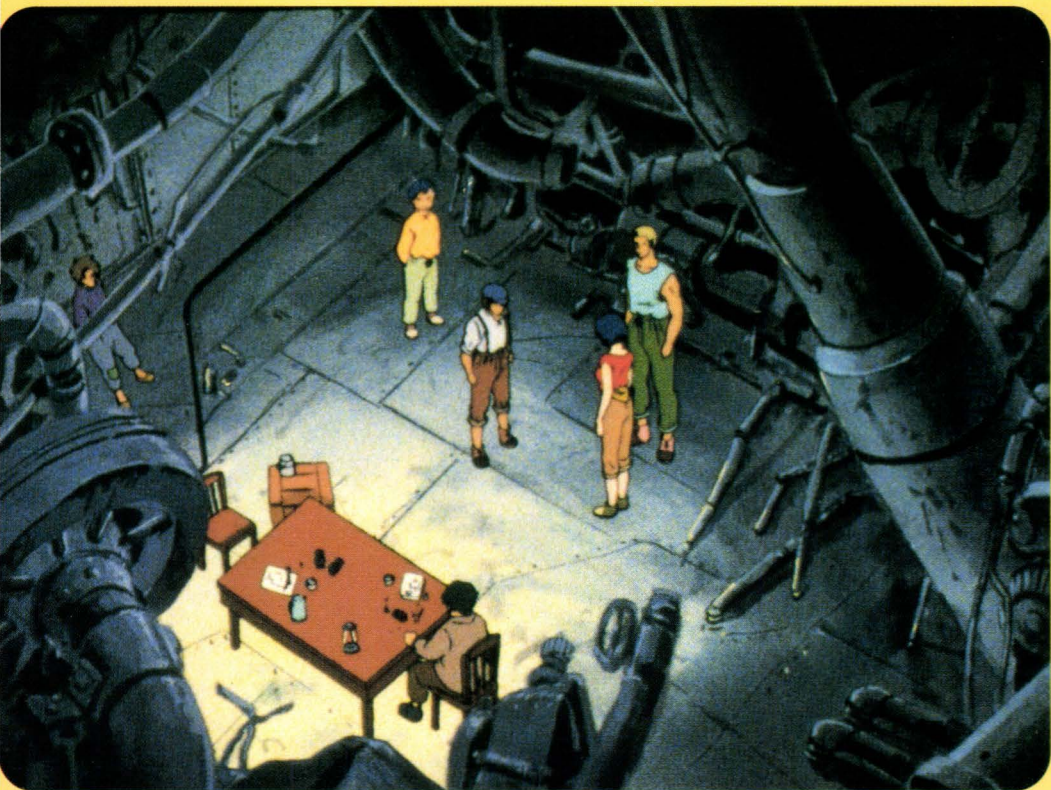
「よかった、みんな無事で。……で、アルフォンスは？」アルフォンスの姿だけがそこにはなかった。

「オレたちも忘れないでくれよ！」声のほうを振りかえるユード。「ニック！」

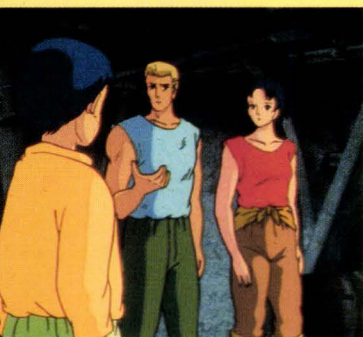
「ユード、アルフォンスは……ここにはいない……」悲しげにうつむくパム。

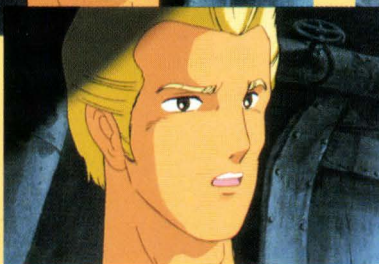
ユード、もう一方を振りかえって「スラーン！」。なつかしいレジスタンスの仲間たちがそろっていた。

「へへへ…」。照れくさそうなスラーン。テーブルの上には爆弾らしきものの部品が。

「えっ？」意外だった。パムの悲しげな表情が気にかかる。

言葉を失い、静まりかえる一同。突然、無言で走りだすユード。

シリュグ「助けだそうとしたんだが……おそかった」

「ええっ!!」がく然とするユード。あのアルフォンスが……。

「ユード、どこへ行くんだ！」驚いて呼びかけるリム。

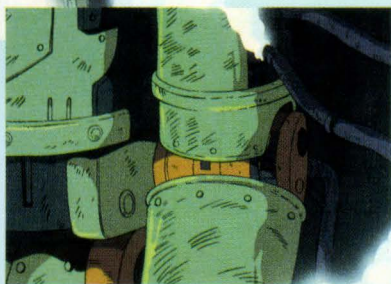
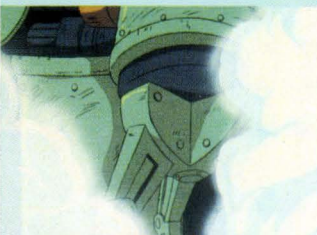
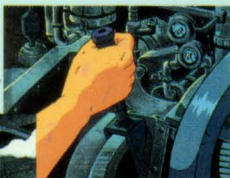
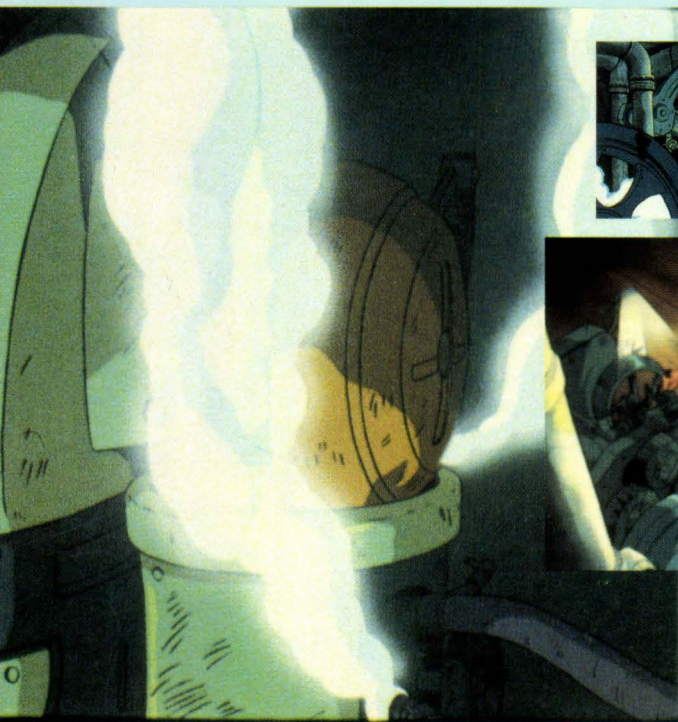
シリュグ「きっと、クラートゥのところだ」

シリュグ、スラーンのほうを見て…「スラーン、爆弾の用意はいいか？」

「クラートゥ？」「アルフォンスが街の人々のために造っていた人体機械だ。ユードもそれを手伝っていた」

スラーン「ああ、いつでも」。シリュグ「よし、じゃあみんな、行動開始だ!!」

クラートゥ

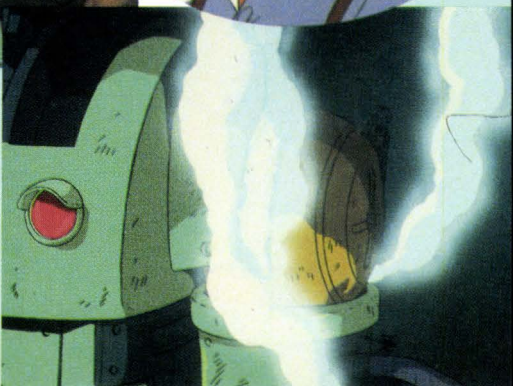
Chapter **10**

仲間たちが革命行動を開始していたとき、ユードはアルフォンスの使っていた部屋にいた。蒸気を吹き出すいろいろな機械や回転する動輪にかこまれて、ユードは黙々と機械を操作している。そのかたわらには大きな人体機械。これこそクラートゥだ。しかし、あらゆる操作をしてもクラートゥは動かない。ぐずぐずしては、いられない‼　彼はクラートゥを残して駆け出してゆく。

レバーを押すユードの手。動きだす動輪。

吹き出す蒸気、回転する動輪や歯車。あたりに響く機械音。

動力盤を操作しながら、脇に立つ人体機械を見あげる。それには、たくさんのパイプが連結されている。

クラートゥよ、動きだせ！　必死の思いで見守っているユード。

ユードの操作によってかすかに震動するクラートゥの頭部。肩からは、蒸気が吹き出している……。

……しかし、歯車の動きが鈍くなって止まってしまう。

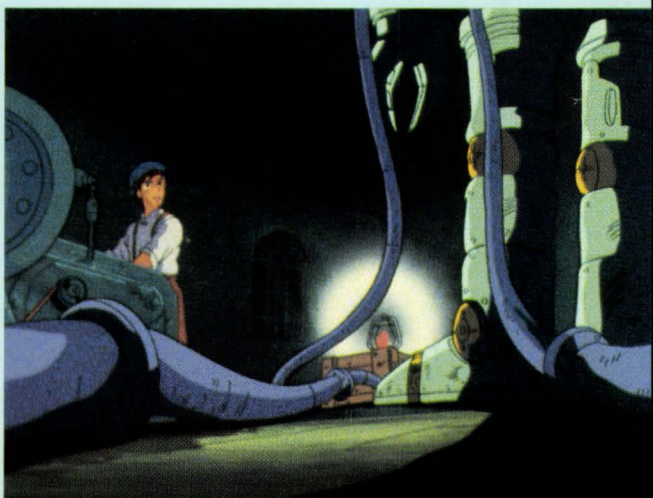
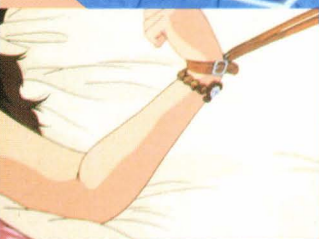
「なにか、足りないのかなあ……」

「ぐずぐずなんかしていられない！」

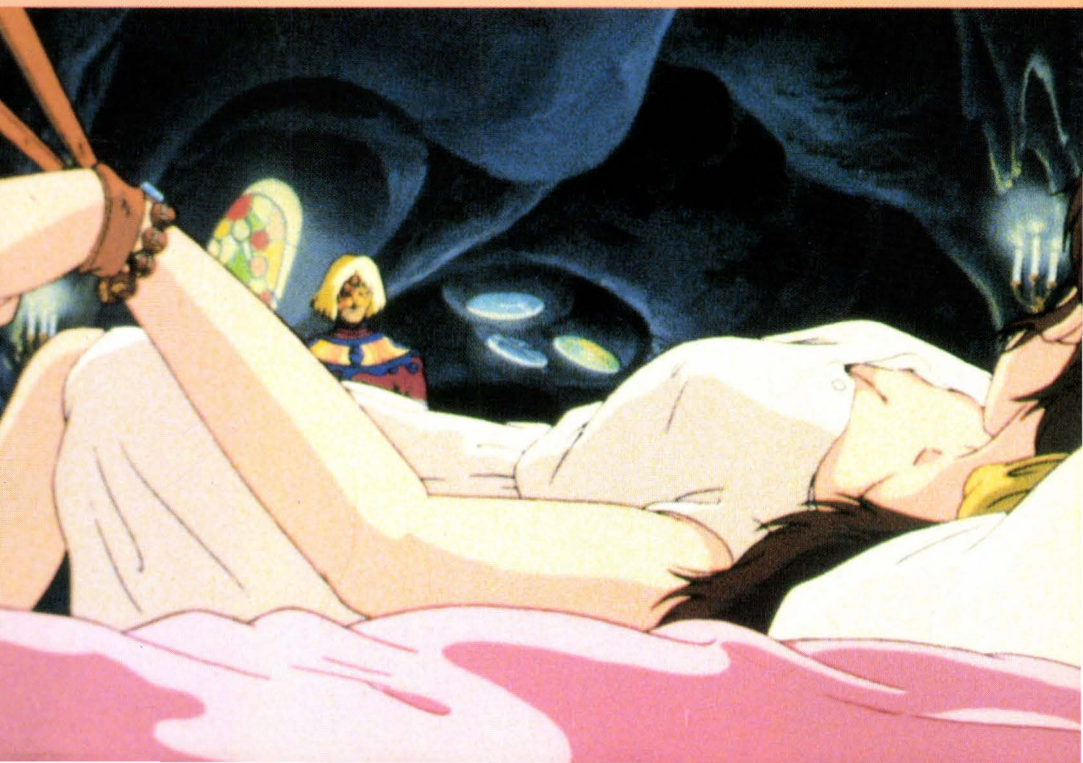
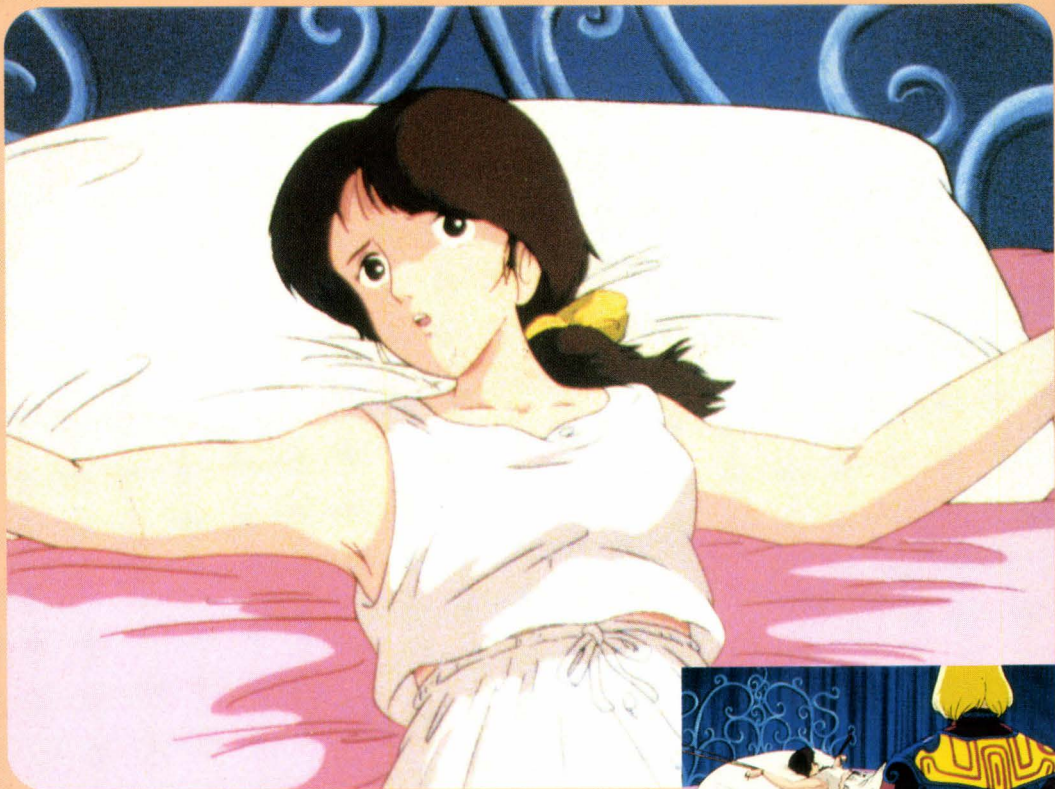
走りだすユード。

静かに見下ろすクラートゥ……。

「やっぱり、アルフォンスでなけりゃダメか……」

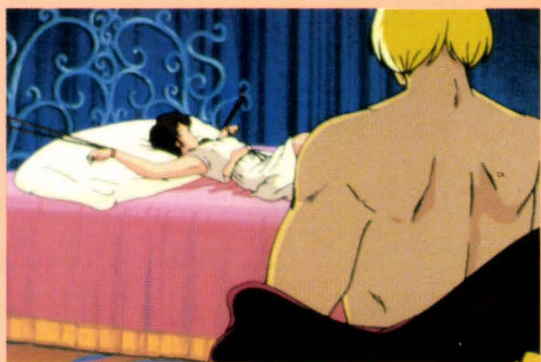
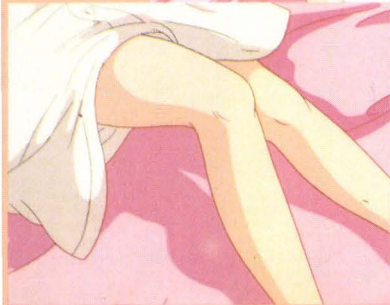
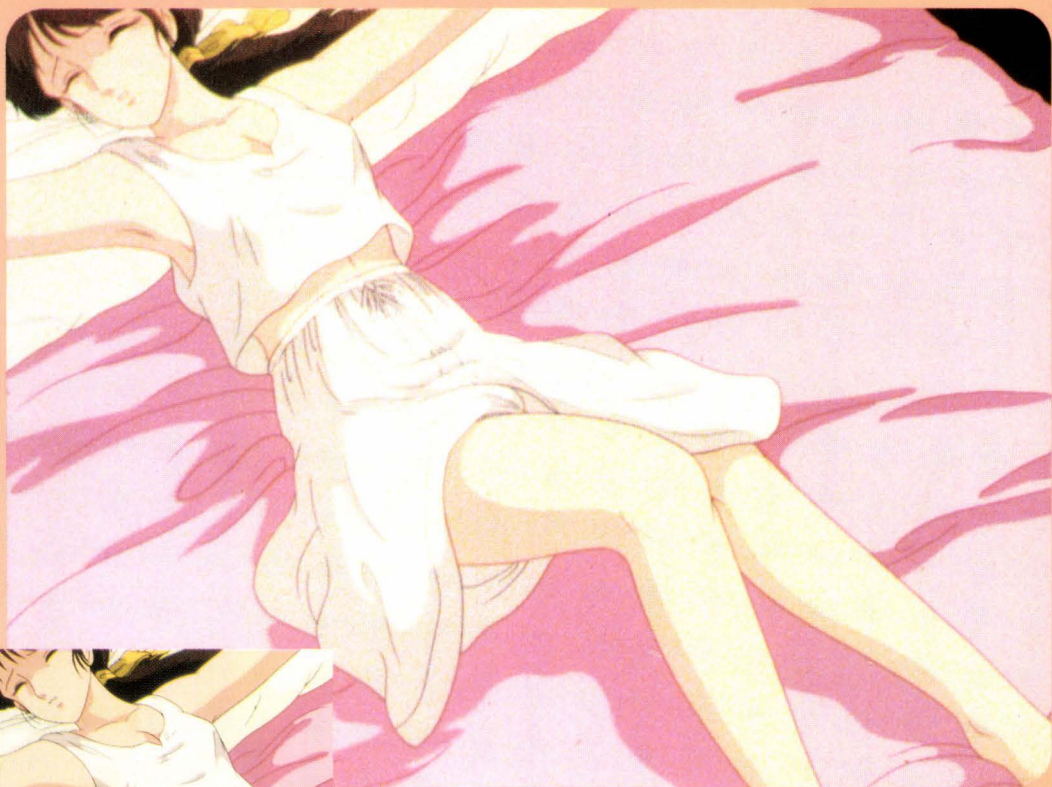
ティアの危機

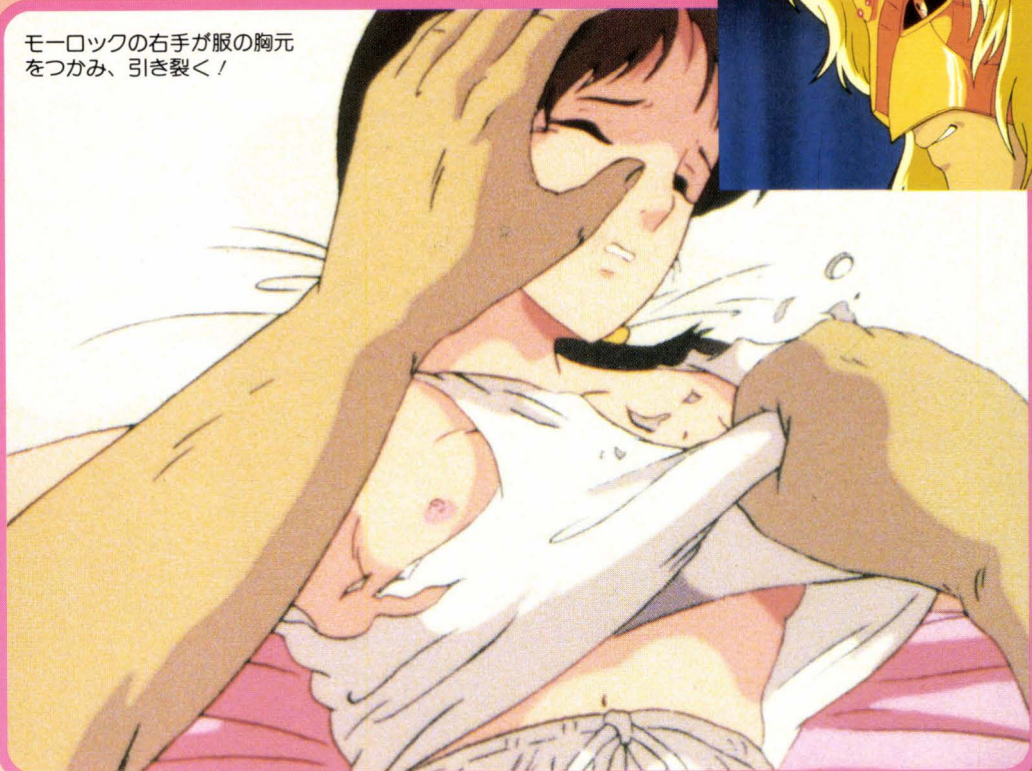
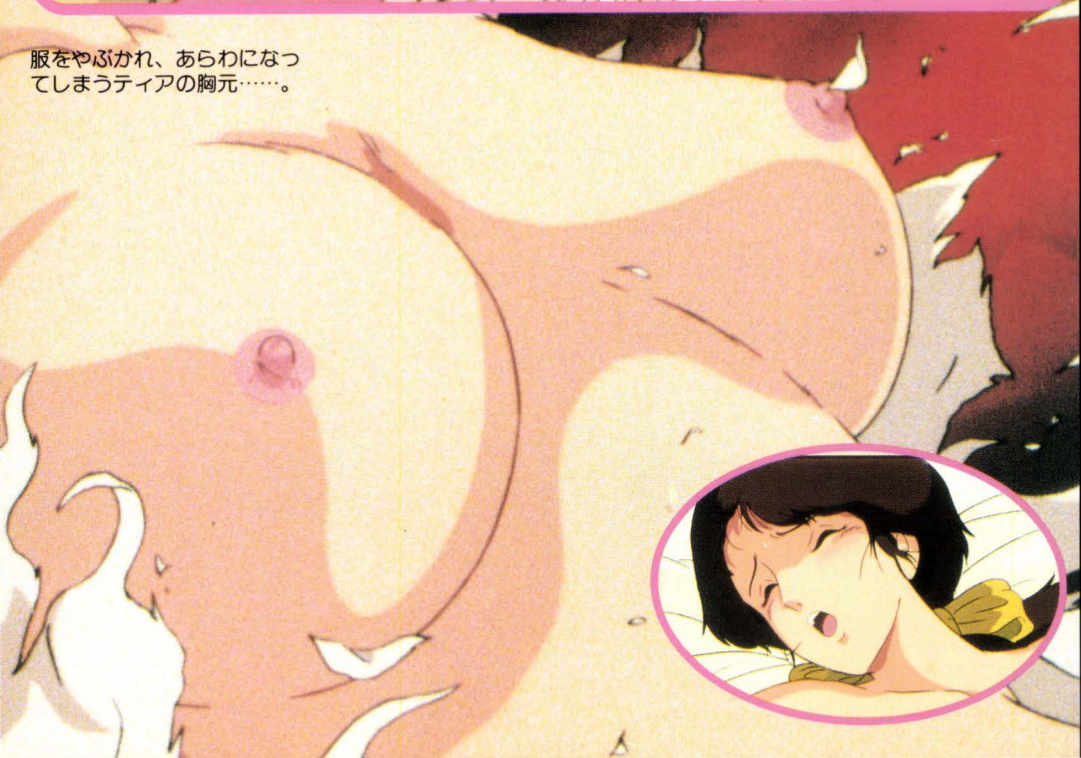
王の間でモーロックに出会ったティアが連れていかれたのは、モーロックの寝室だった。しかも両手をベッドにくくりつけられて…。恐怖にふるえているティアの前にモーロックが現れる。そこでティアは、犯されてしまう。

空はだいぶ暗くなっている。再び狂王モーロックの居城が映し出される。

部屋の中央のベッドに哀れにもくくりつけられているティア。

ベッドの上でもがく。そのとき奥からモーロックが近づいてきた。

ベッド脇に立つモーロック。それに気づくティア。

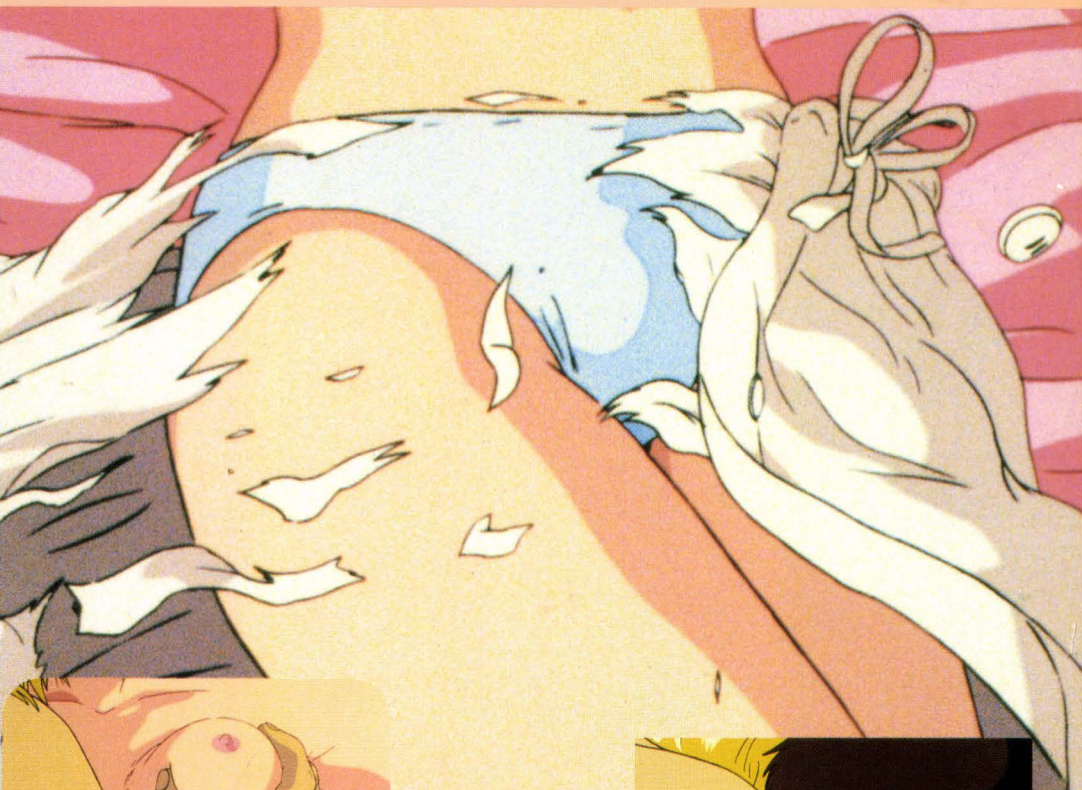
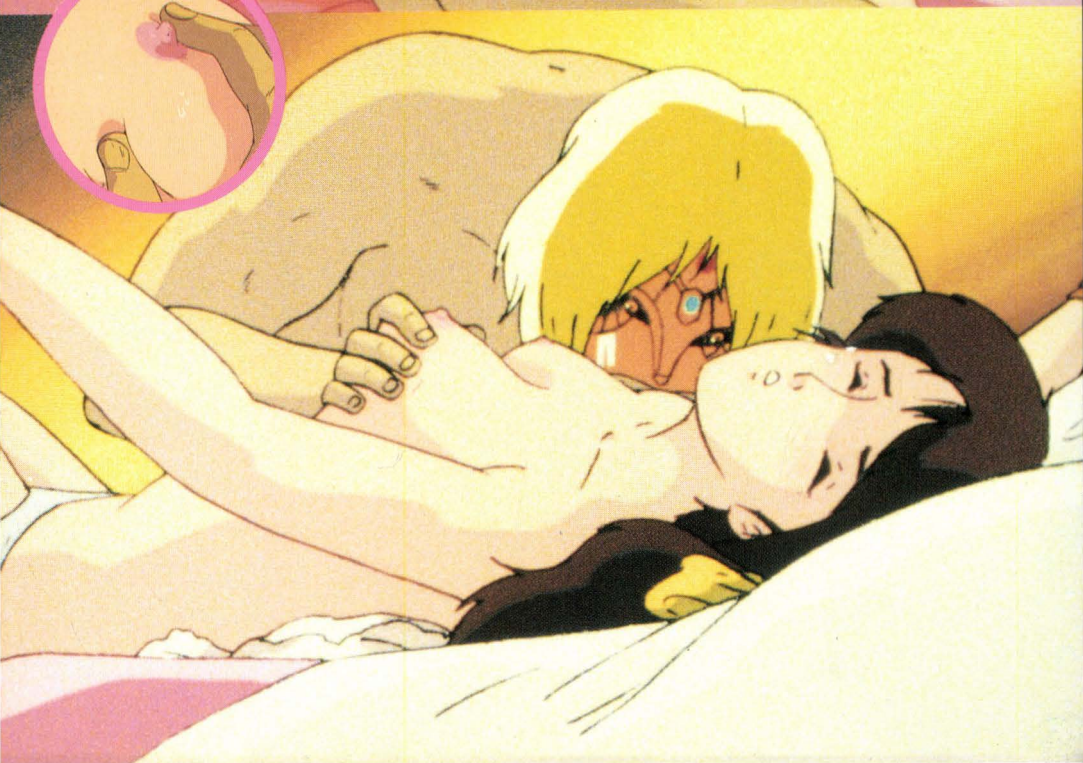
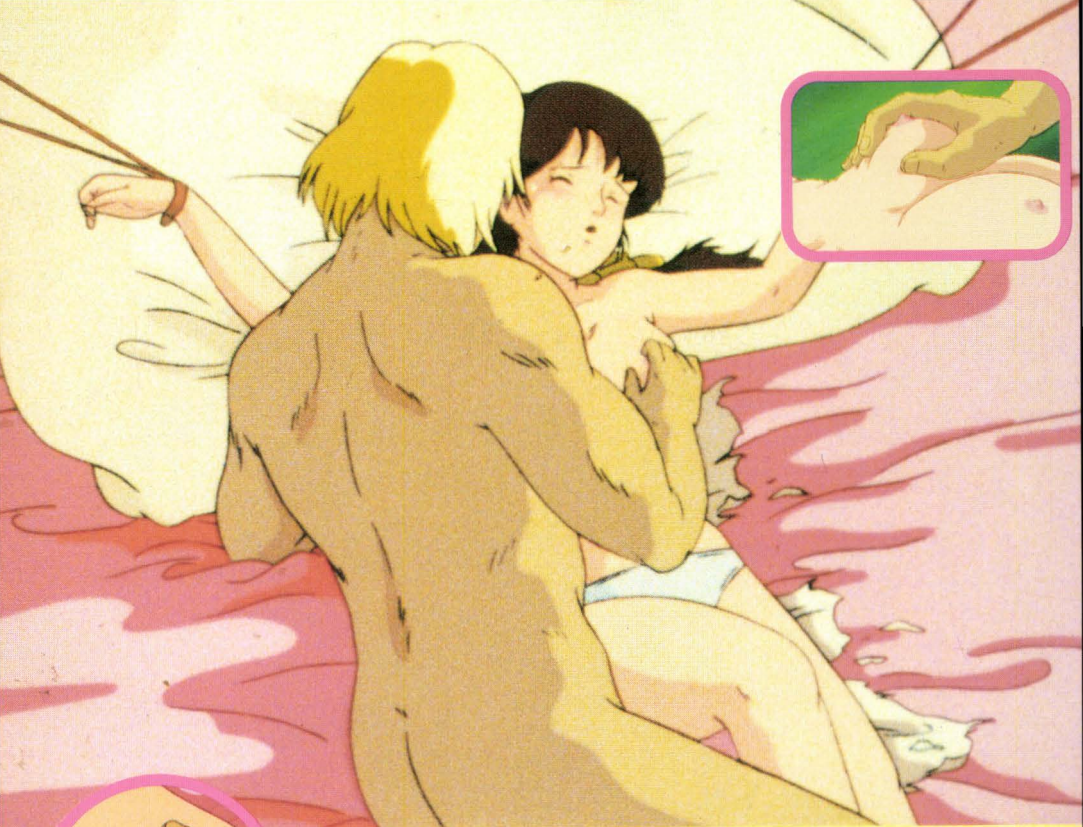
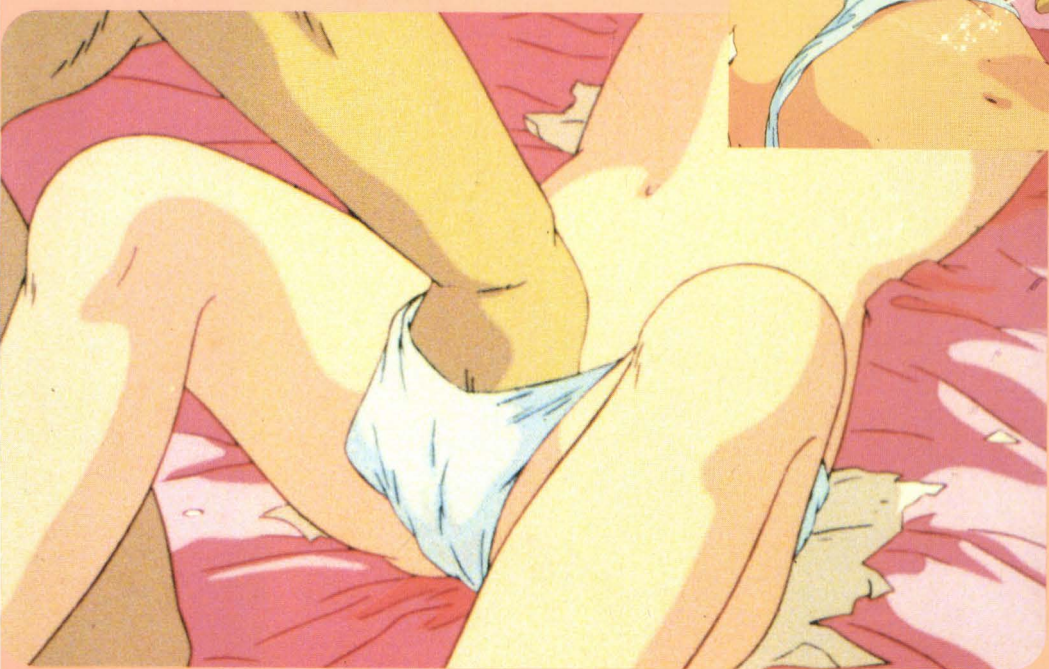
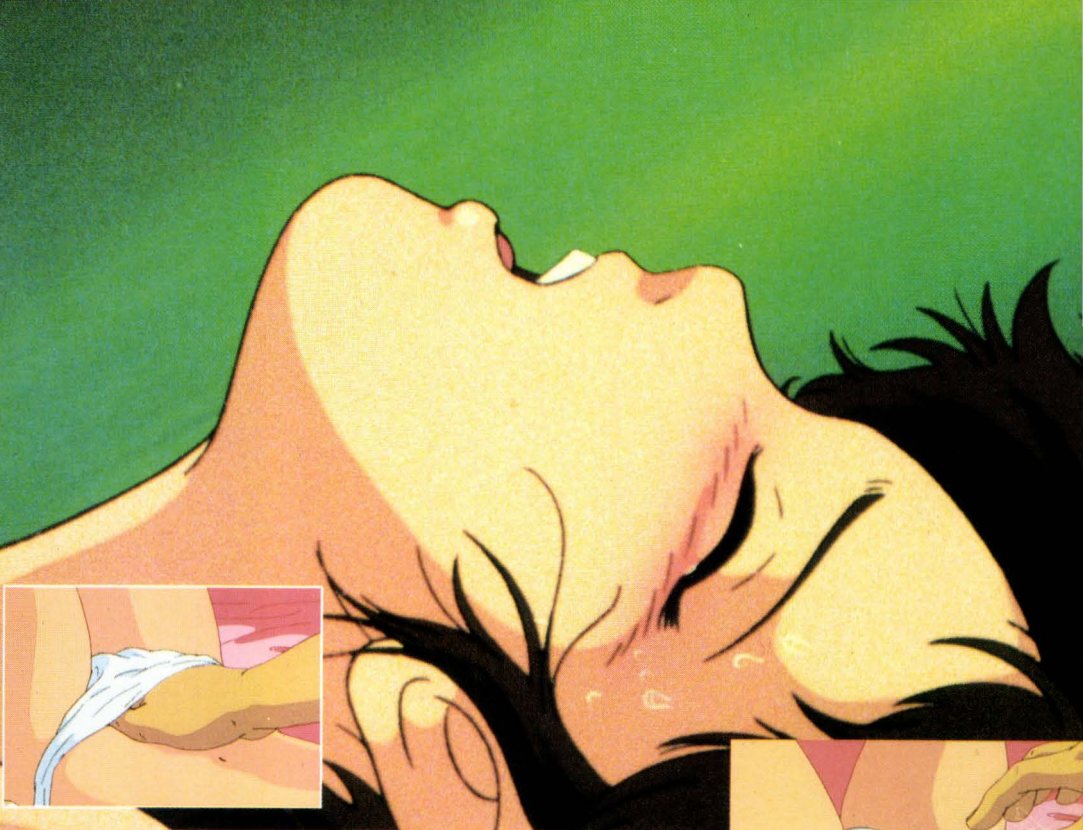
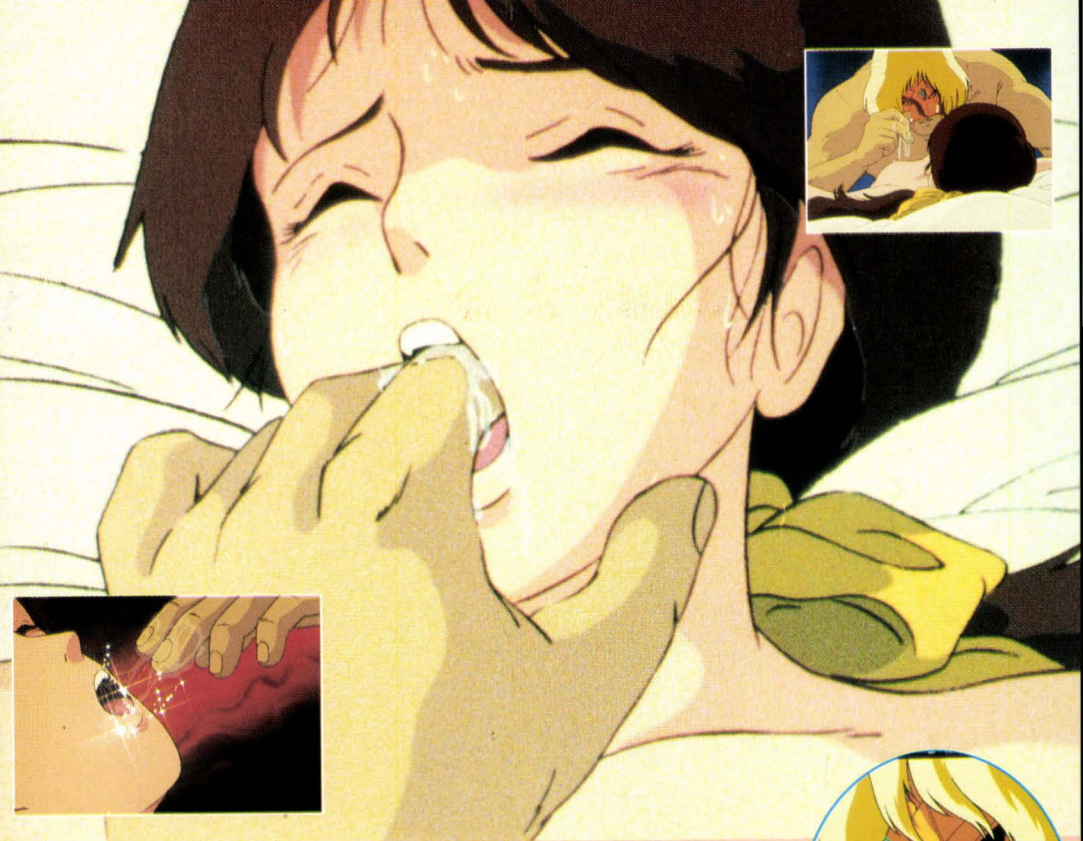
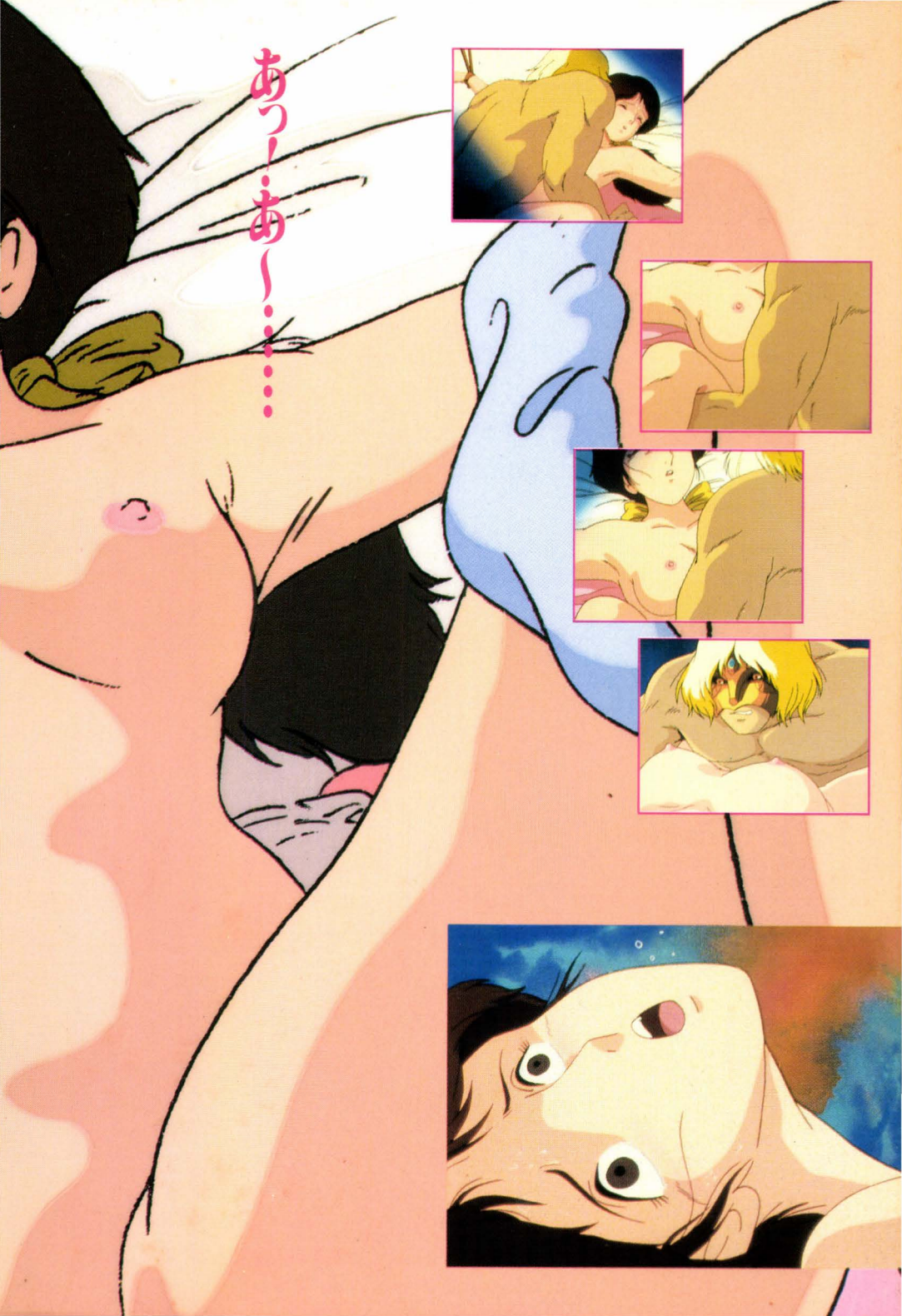
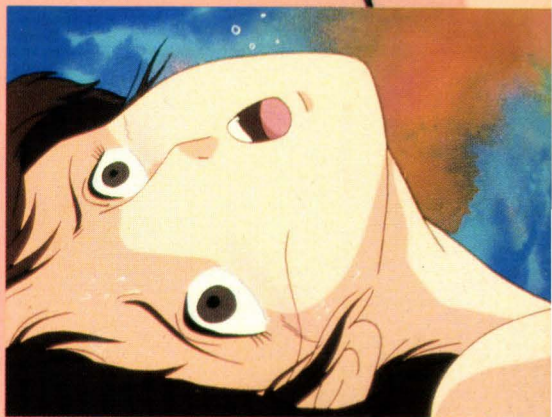
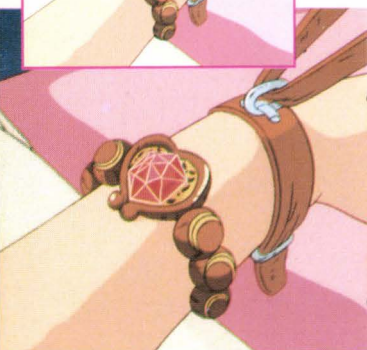
「フフフ……」冷たく静かに笑うモーロック。

「たっぷりと時間をかけて快楽をおまえに教えてやる」モーロックの目のアップ。

「は、はなして！」「はなしてやるとも。快楽に溺れてしまえば縛る必要はない」

服を脱いでティアの足元に視線を移すモーロック。

モーロックの右手が服の胸元
をつかみ、引き裂く！

服をやぶかれ、あらわになっ
てしまうティアの胸元……。

やにわにスカートの中に手が突っ込まれ、
今度はスカートにモーロックの手が…。

「やめて！」
懸命に抵抗するティア。

あっ！あ〜……

苦痛にゆがむティアの表情。彼女の頬には、涙が流れる……。

そのとき、彼女のブレスレットの水晶石が赤く輝いた！

それに反応するクラートゥ。目が赤く光りだした……。

ユード出撃

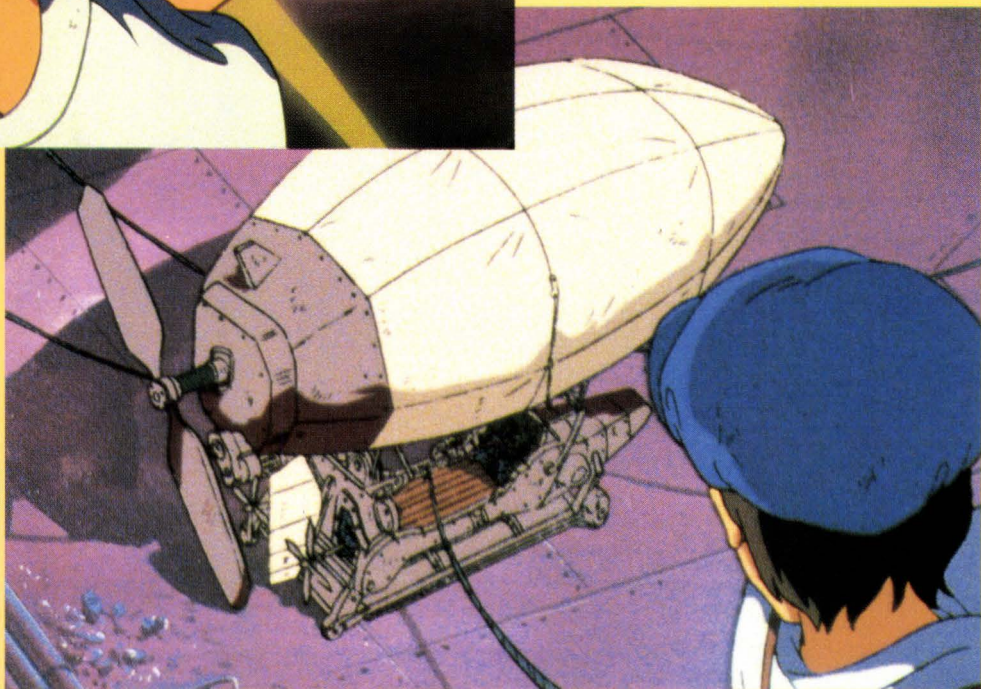
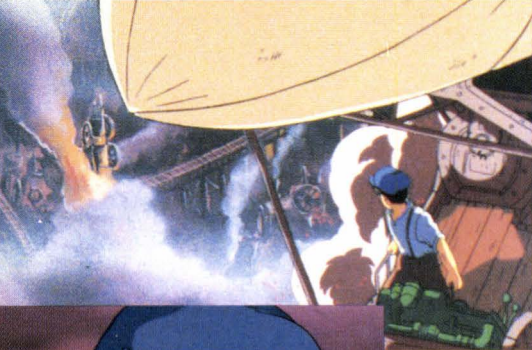
Chapter 12

サーチライトが輝く夜の飛行場。ユードは古ぼけた小さな飛行船を見下ろしている。飛行船のまわりには、誰もいないようだ。今がチャンスとばかりに、ニヤリと笑うユード。…… ちょうどそのとき、工場では爆発が続発する。それに勇気づけられるように、彼はモーロックの居城を目指す。

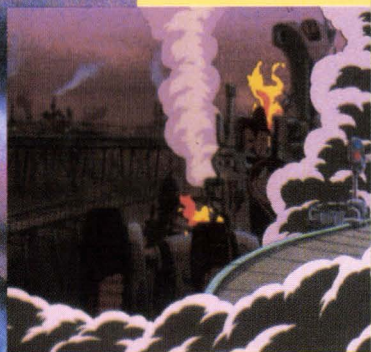
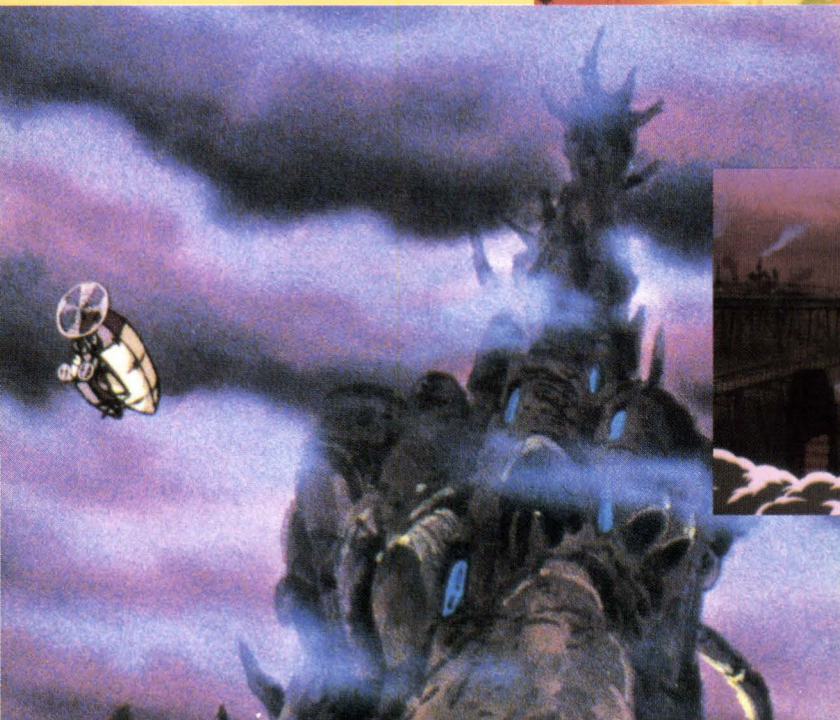
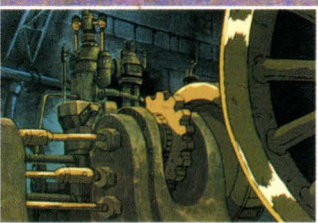
ユードは、飛行場の一角、建物のかげに身を潜める。

バルテュスの夜空を明るく照らすサーチライト。

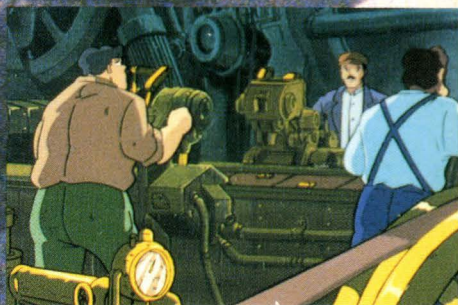
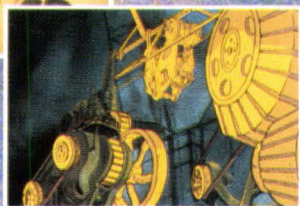
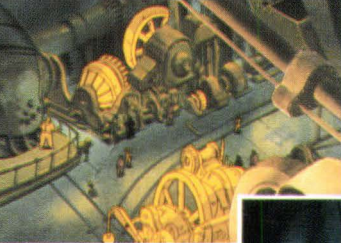
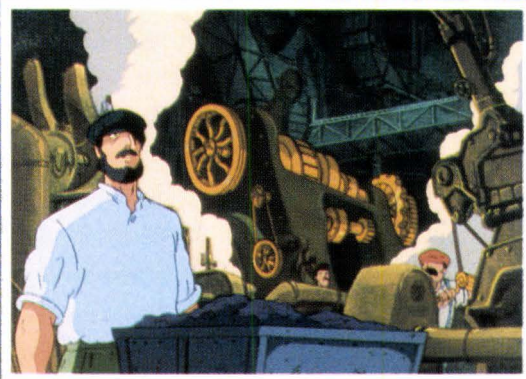
ニヤリとするユード。うまいぐあいにいきそうだ……。

古ぼけた小型飛行船を見下ろす。まわりには誰もいないようだ。

乗った飛行船の中から炎と煙を吹き出す工場を見下ろすユード。「リムたち、派手にやってるなっ！」

そのとき、工場の一角で爆発あちこちで火の手があがる。

上を見上げるユード。目指すはモーロックの居城だ！

工場爆破

Chapter **13**

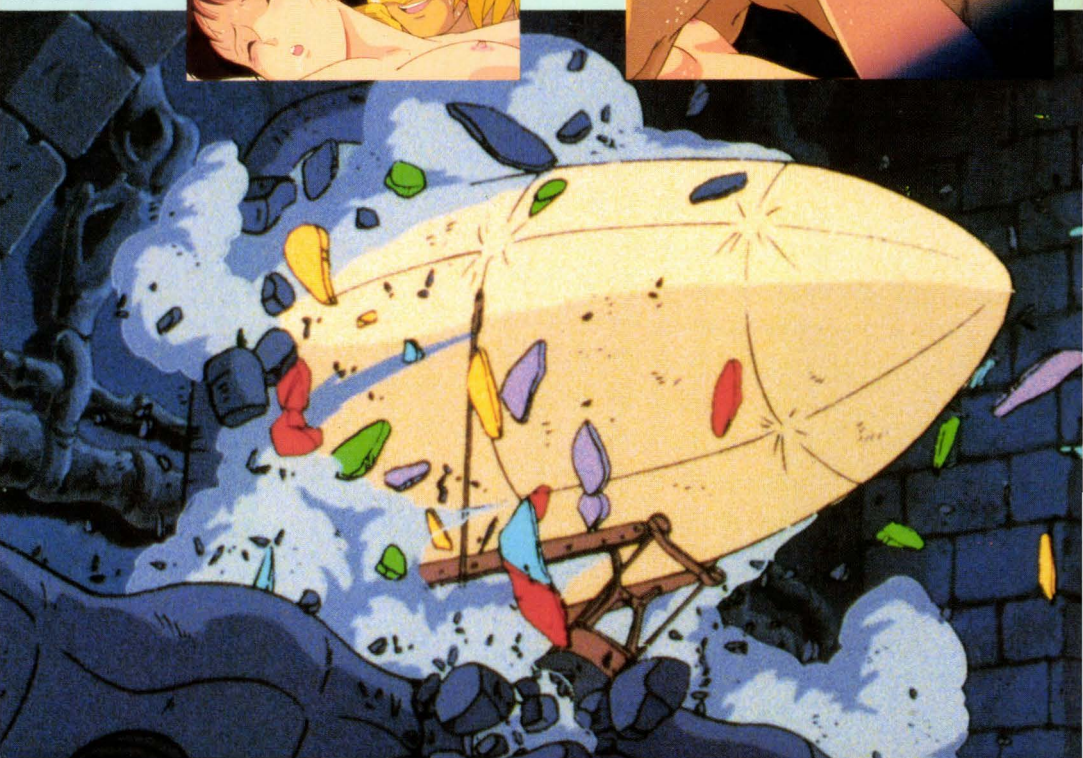
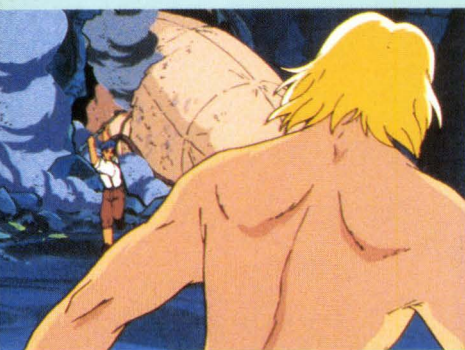
工場のあちこちで、突然起こった爆発。さっきまで動き続けていた機械群は、停止してしまう。工場の内部は炎と煙とで満たされる。シリュグたちレジスタンスの、ゲリラ活動が始まったのだ。どうやら、この爆発と破壊はバルテュス全域に及んでるようすだ。工場の作業員たちは止った機械を見上げ、あっけにとられて顔を見合わすばかり。夢から醒めたような表情の人々……。

煙を吹きあげて停止してしまった機械に、あっけにとられてあたりを見廻す作業員たち。呆然とした表情。

ユード突入

Chapter 14

モーロックは執ようにティアを犯し続け、何度目かの絶頂に達していた。しかしそのとき、寝室の窓がものすごい音をたてて壊れる。ユードの操縦する小型飛行船が突入したのだ！ あわてて振り返るモーロック。そこに鉄パイプを振りかざしたユードが駆けてくる。ユードの一撃が、モーロックに振り下ろされた！ よけて倒れたモーロックのすきをついて、ユードはティアを救出する。

狂ったように腰を動かし続けるモーロック。ティアは抵抗できない。

絶頂に達する。「こんなに酔ったのは初めてだ…」

そのとき、窓を突き破ってユードの飛行船が突入！

モーロックめがけ、鉄パイプを持ったユードが突進してくる。

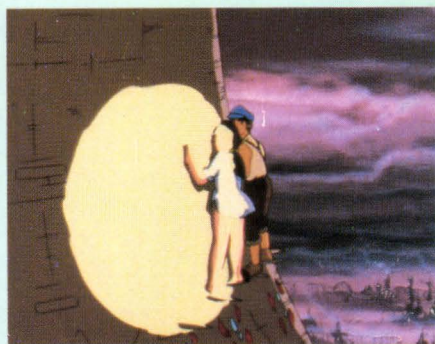
モーロックがよけたすきにティアを救出。

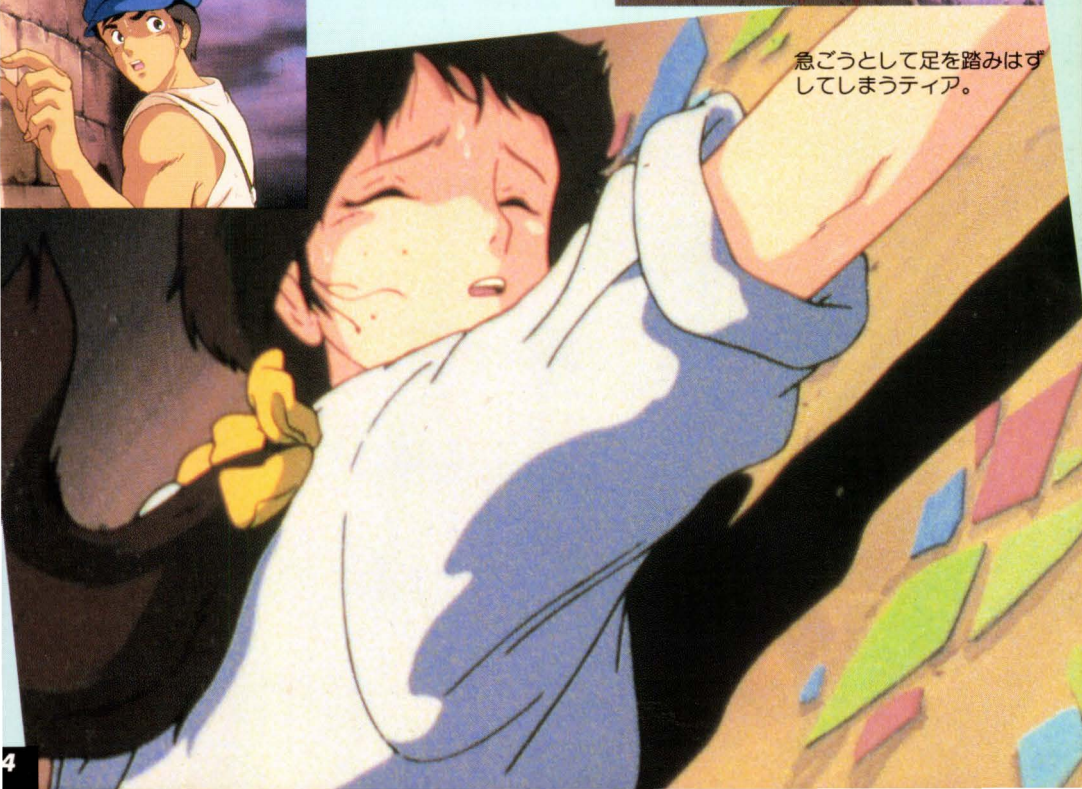
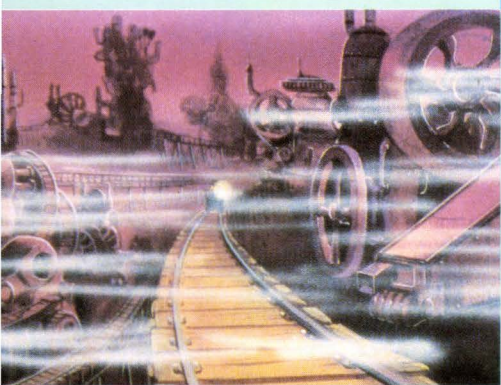
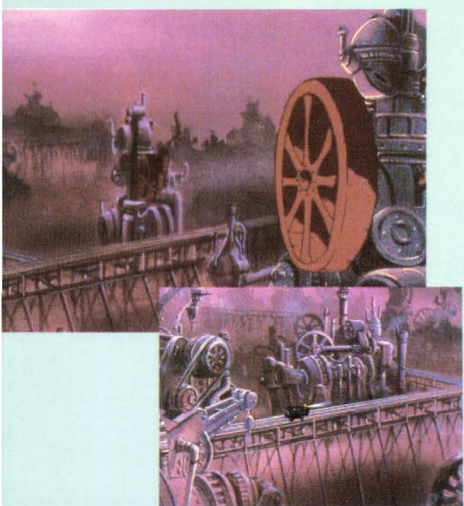
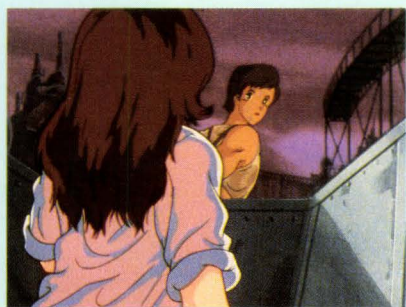
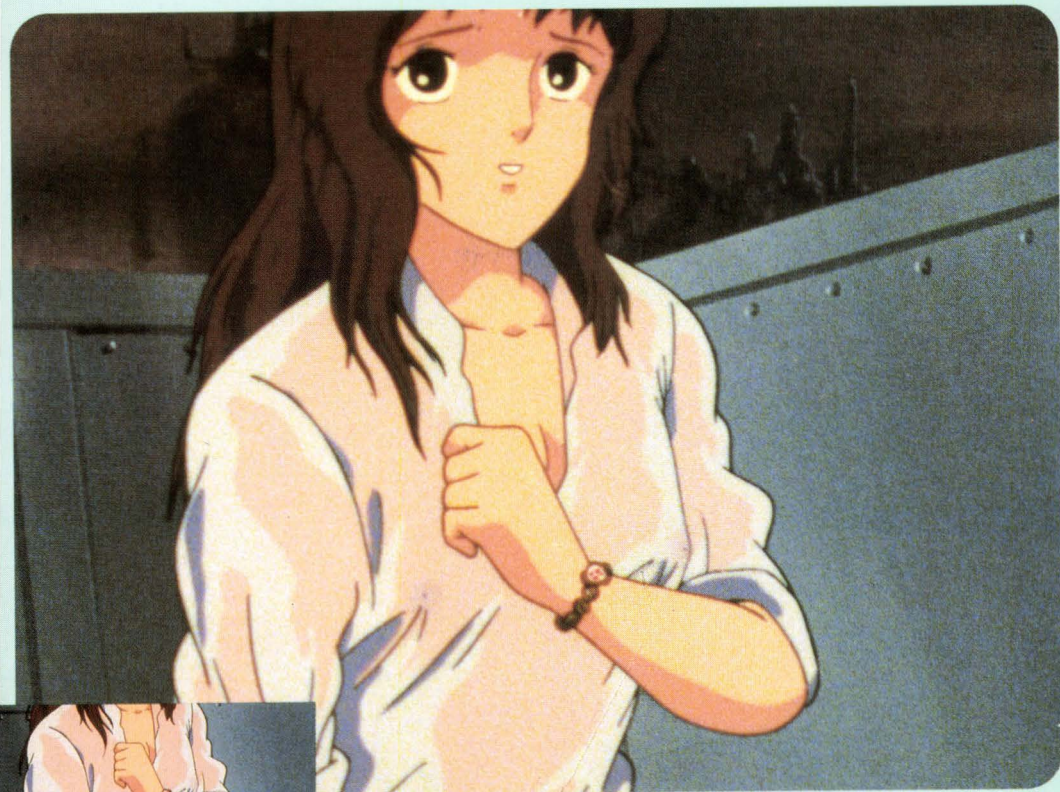
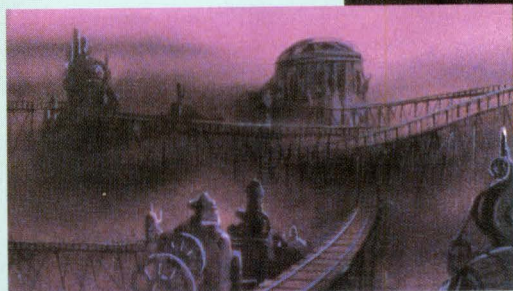
「おのれ、あの小僧め。逃がしはせぬぞ!!」

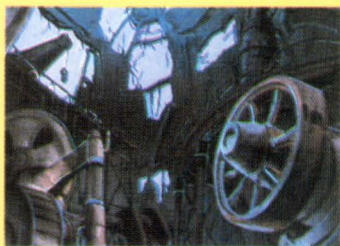
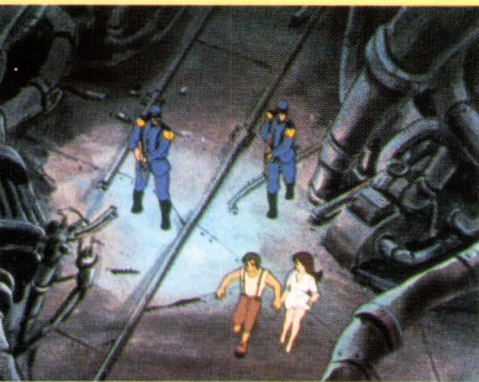
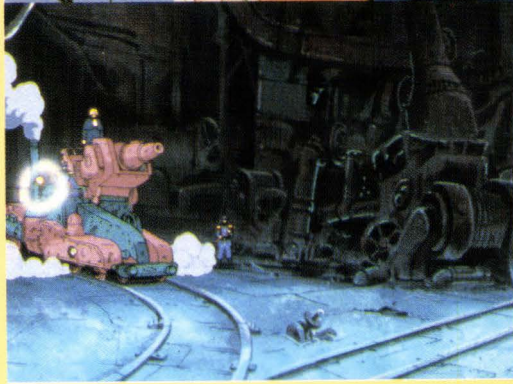
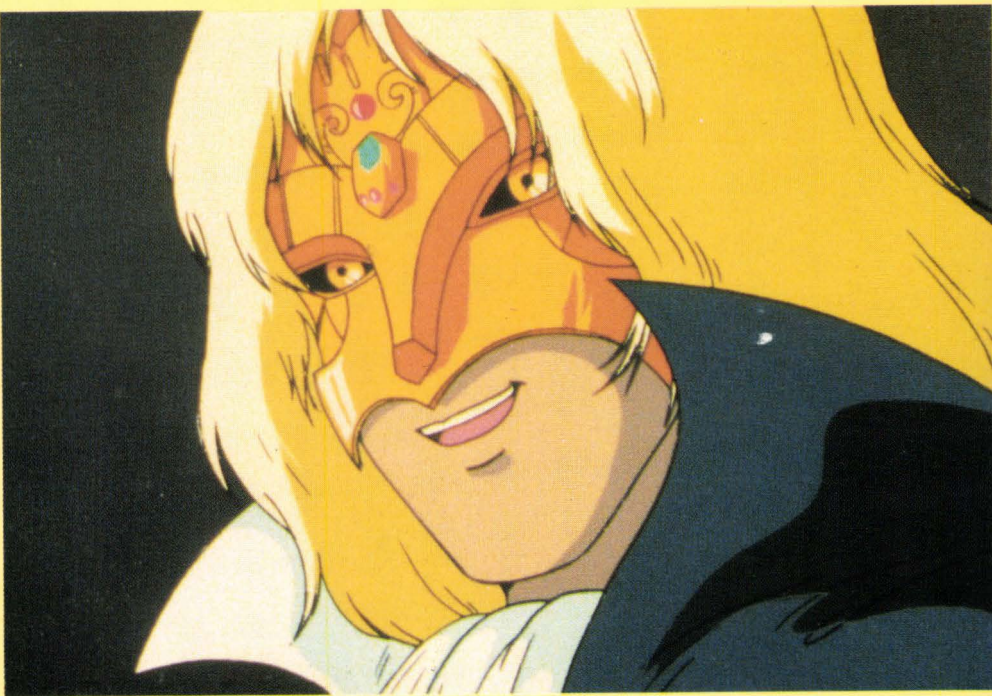
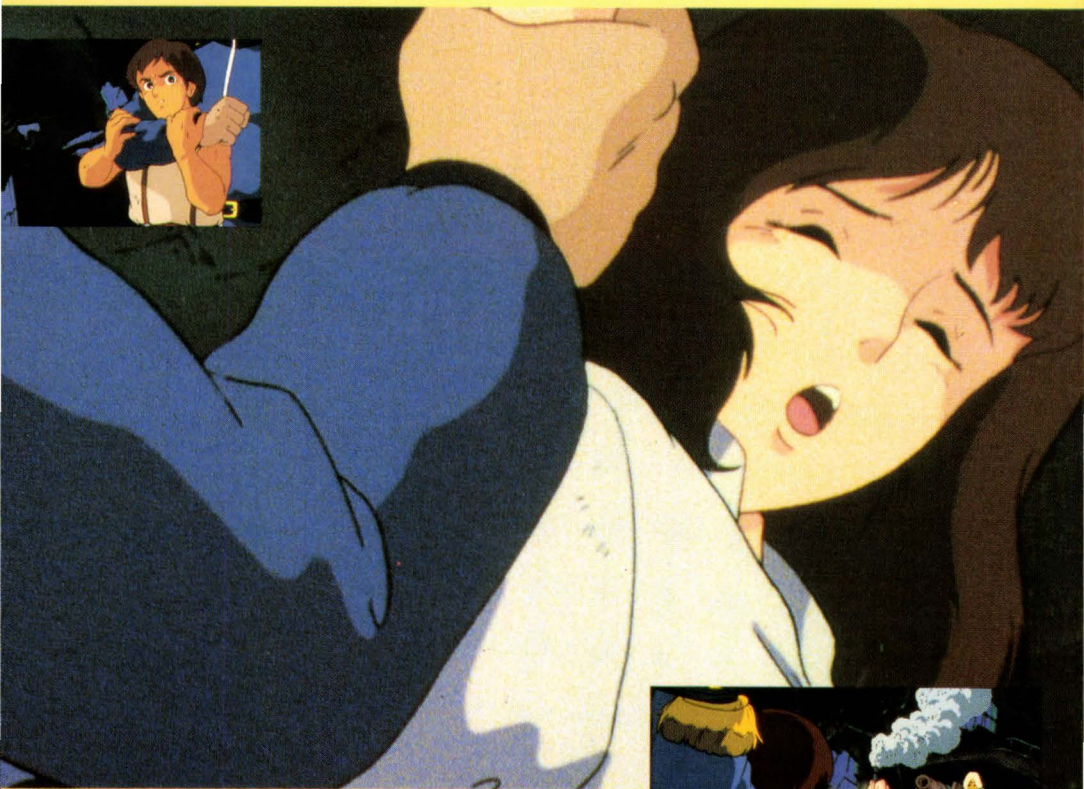
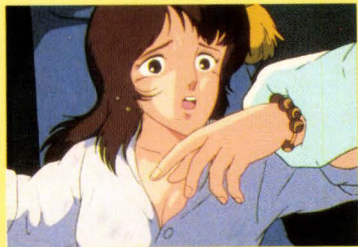
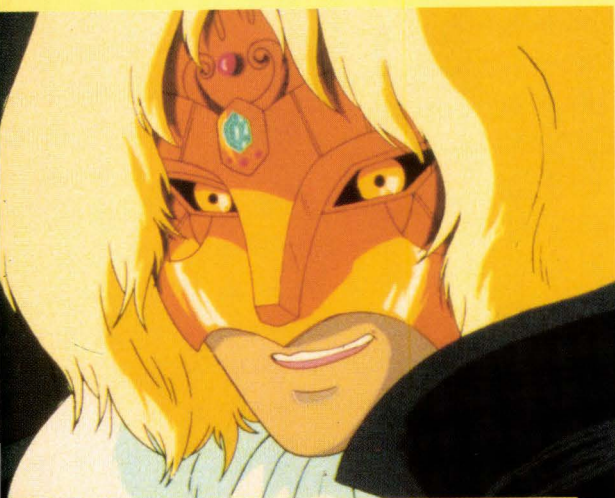
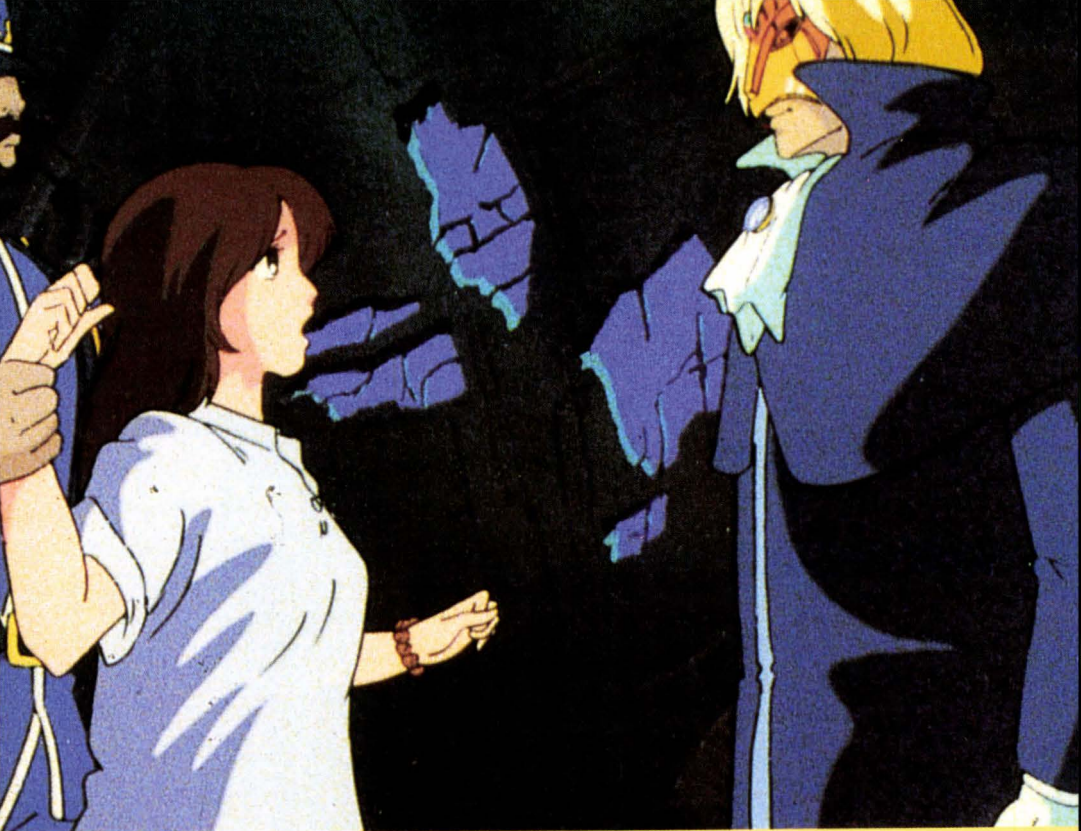
Chapter 15 逃避行

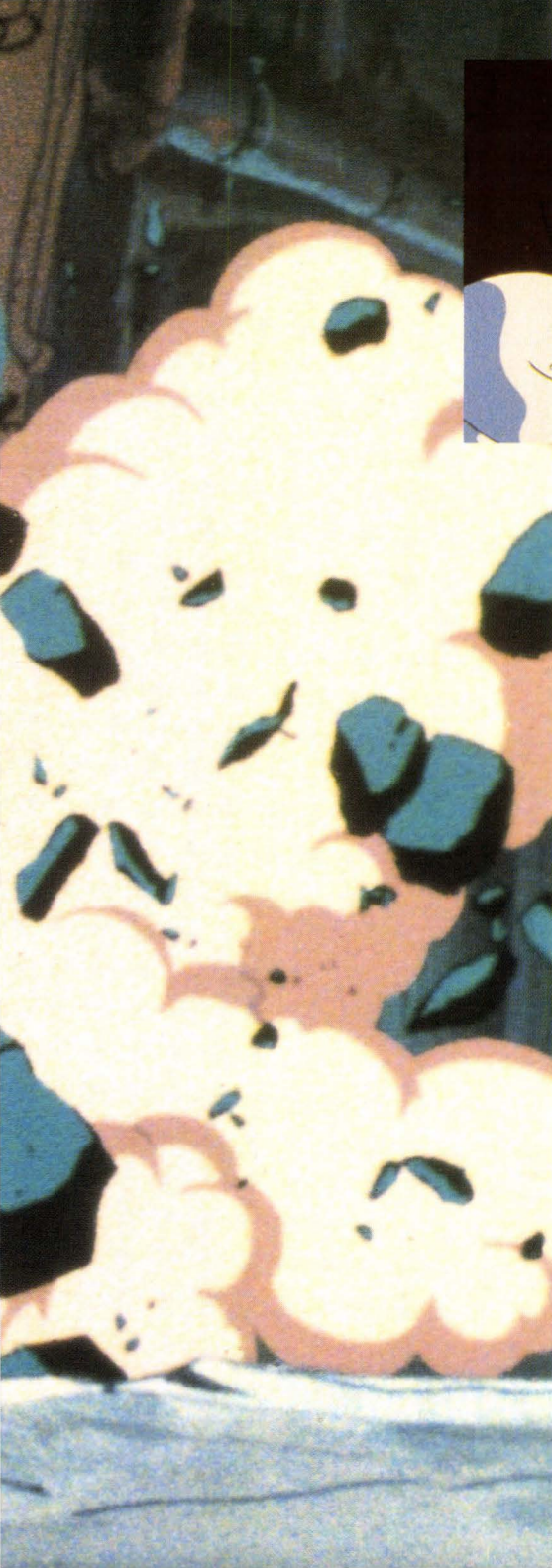
やっとのことでモーロックの寝室を脱出したティアとユードは、居城の外壁をつたって逃げた。しかしティアは足を踏みはずして、助けようとしたユードもろとも下へ転落してしまう。ようやくふたりは、トロッコに乗って逃げることができたが、途中ティアの腕の水晶の色が変わっていることに気づく。

「とらえろ!」ふたりを照らす兵士の声。

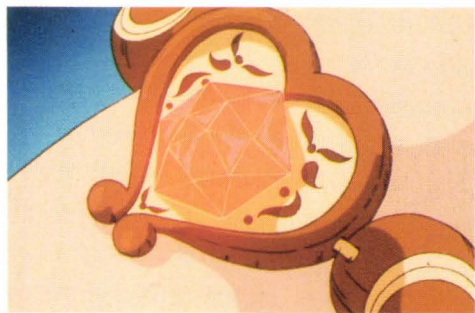
必死で王の塔の外壁を歩くティアとユード。

急ごうとして足を踏みはずしてしまうティア。

必死にティアの手をつかむが、ユードも落ちてしまう。

壁に開いた穴に落ち込むふたり。魚のような排水口から吐き出される……。

静けさのただよっている工業都市。トロッコの音だけが
響いてくる。トロッコに乗って進むティアとユード。

「大丈夫かい？」「ええ…」ユードはトロッコを運転している。

ティア「あっ、石が…!?」。ユード「色が変わっている、どうしたんだろう?」。石の色は赤く変わっていた。

モーロックVSユード Chapter 16

ユードとティアは、工場の廃墟の中を死にもの狂いで駆けていた。そのとき、彼らの前に立ちはだかる人影。モーロックの手下のものたちだった。そしてそのうしろから迫るのは、モーロックを乗せた列車砲がやってくる。再びティアは、そしてユードは、モーロックの手に捕われてしまうのか？「兄さ〜ん!!」ティアの叫びに応えるかのように、腕の水晶がひときわ赤く輝きだした!!

列車に乗ったモーロックが、ふたりに近づいてくる。
「さあ、こちらへ来るのだ。お嬢さん……」。

兵士がふたりに飛びかかる。思う間もなく、兵士に腕を
つかまれて、引っ張られてしまうティア。「あ〜っ！」

「アルフォンスだと？　あの反逆者の妹か。フフフ、だったらあきらめるのだな」

「は、はなして！」「フフフ、おとなしくせんか！」
「いやっ、ユード！　アルフォンス兄さん!!」

モーロック「あの男は、わたしが始末してやったよ……」

アルフォンスは、もういない……。驚くティアの表情。

「兄さ――ん!!」　ティアの心に悲しみが込みあげてくる。泣き叫び、飛び散る涙……。

彼女の悲しみがわかるかのように、ブレスレットの水晶石がひときわ赤く輝きはじめた！

突然ドームの壁の一部がふっ飛ぶ。
ドームの中に砂煙がたちこめる。

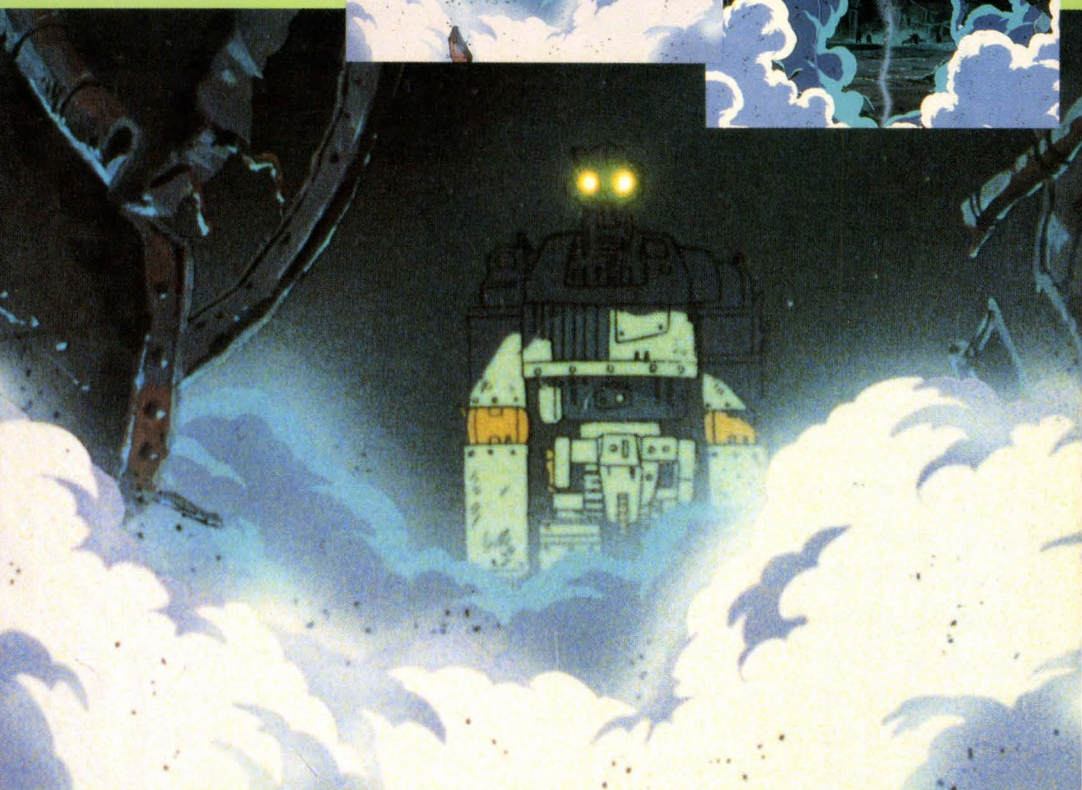
「ガチャン！　ガチャン！」クラートゥの足音がドームに響く。

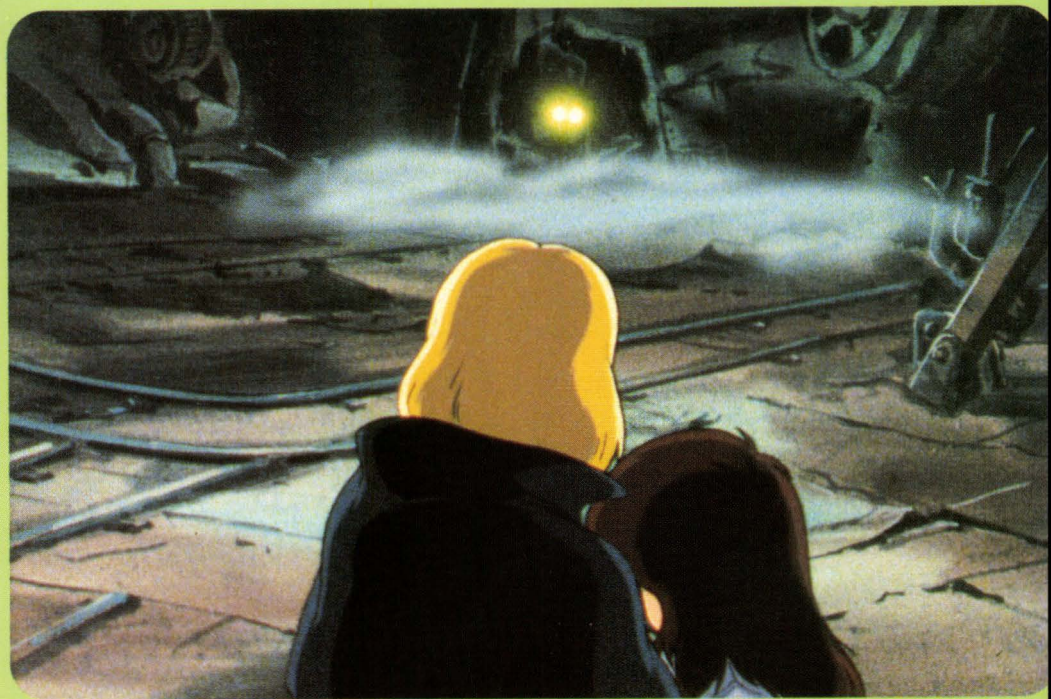
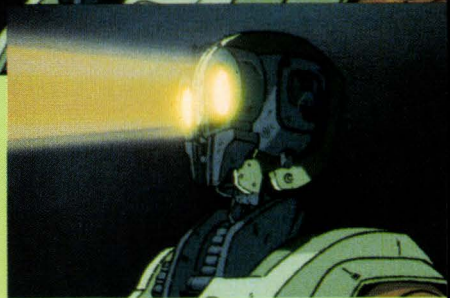
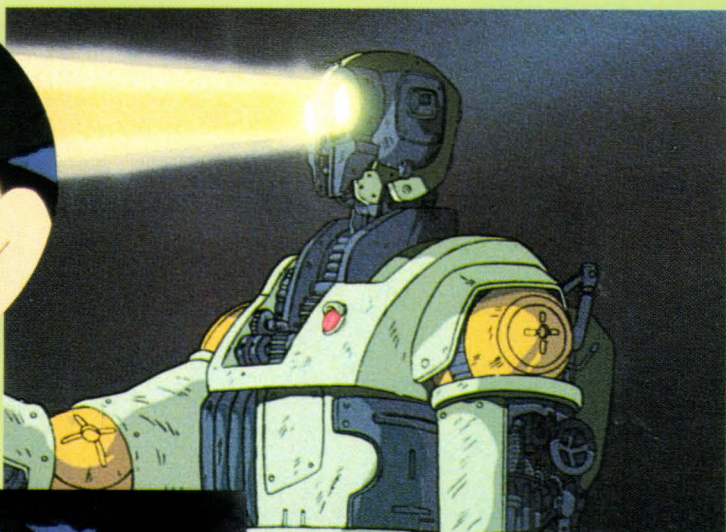
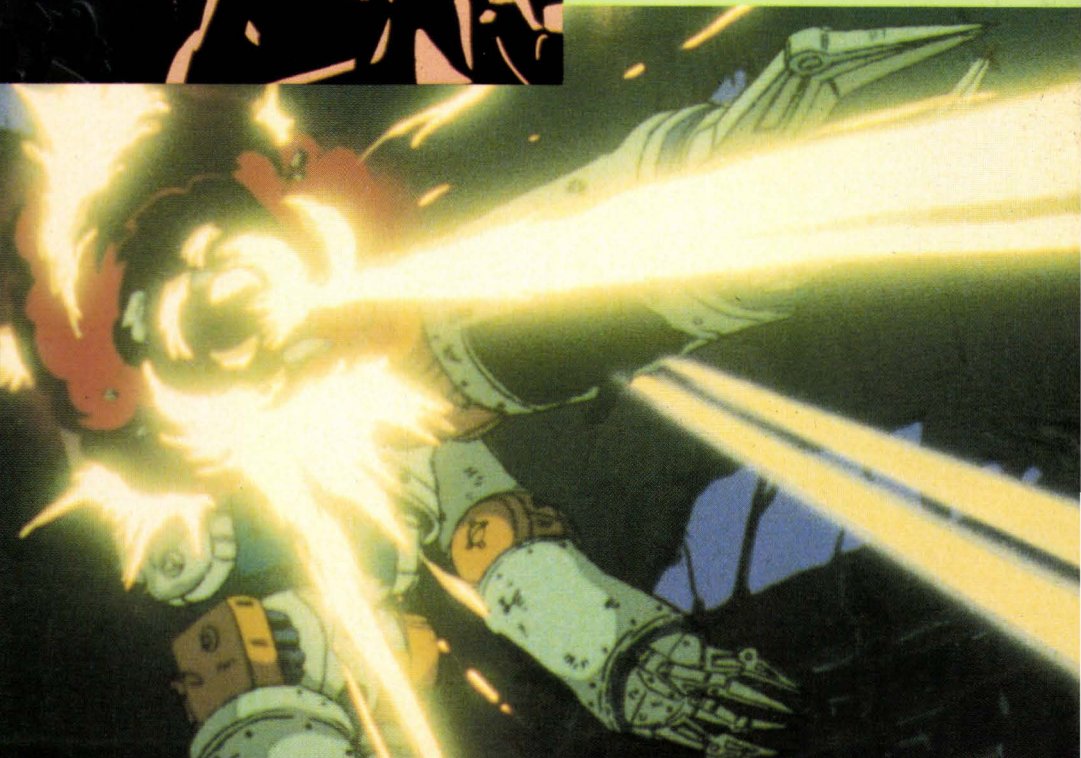
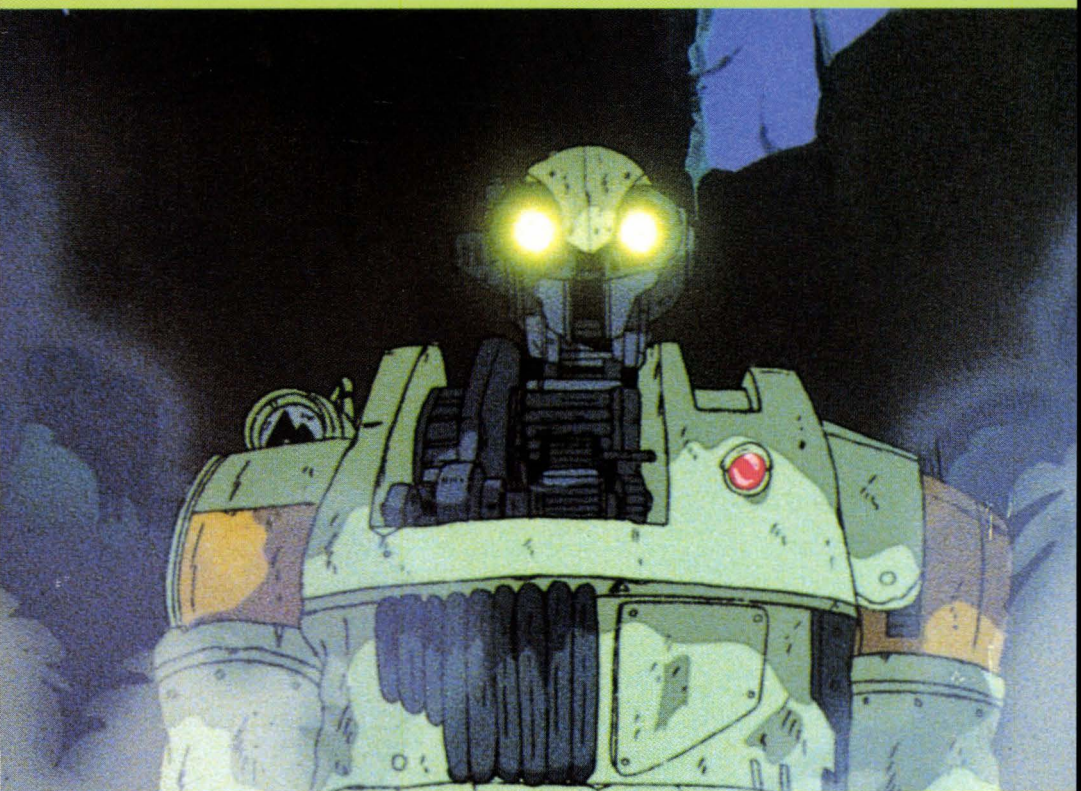
「むっ‼」何が起きたのかと、いて振り向くモーロック。

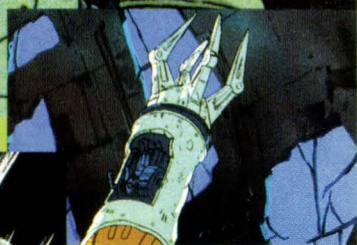
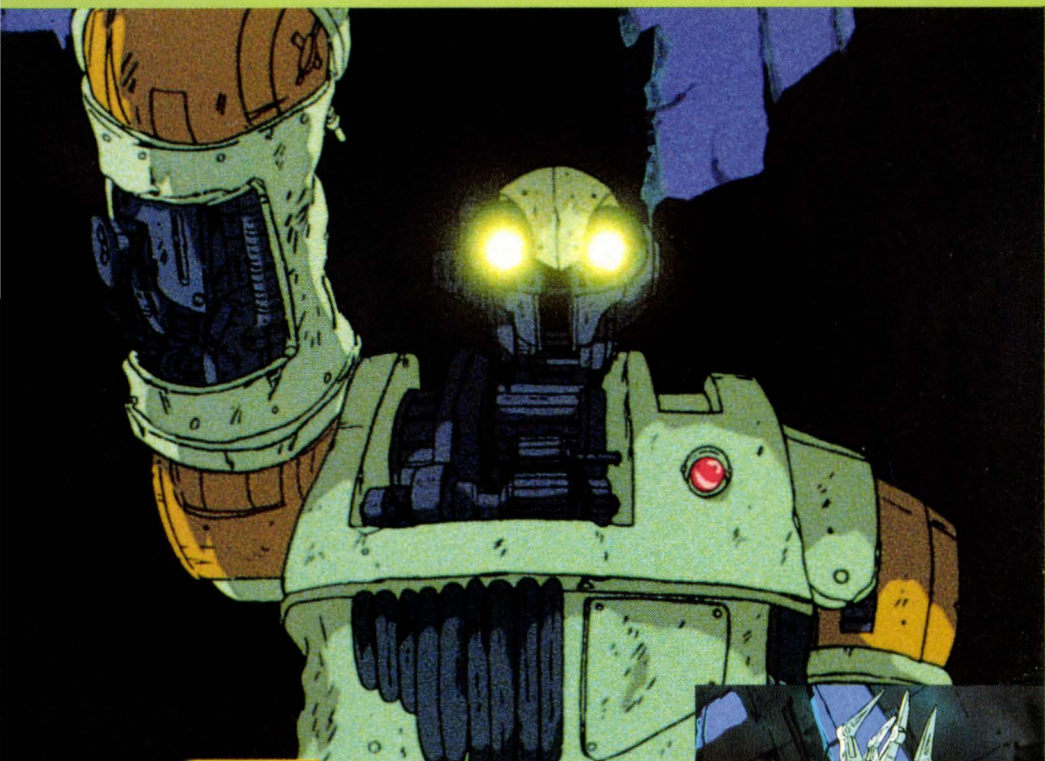
「あっ‼」兵士につかまったユードが見たものは……⁉

クラートゥ発動

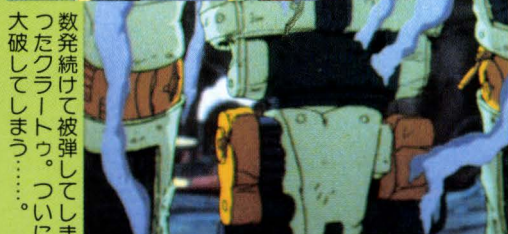
Chapter **17**

崩れ落ちるガレキ
のむこうに、ふた
つの目が光る。

そこから現れた巨体は
クラートゥ！　体から
吹き出す蒸気……。

クラートゥの目から出るサーチライトが、モーロックにつかまったティアを照らす。

「なんだ、このガラクタは？ 何をしている。早く始末しろ！」

それを合図に、砲兵の砲撃がクラートゥに炸裂。右肩に着弾。よろけるクラートゥ。

砲撃の煙の中から姿を現すクラートゥ。しかし何ごともなかったかのように近づいてくる……。

クラートゥの反撃。右腕が列車砲めがけて振り下ろされる！

「ええいっ！
役立たずめ。
私がやるっ」

ティアの手を引っ張り列車砲に飛び乗るモーロック。

モーロックの放った砲弾がクラートゥに命中。

数発続けて被弾してしまったクラートゥ。ついに大破してしまう……。

グラリと大きく傾くクラートゥの機体。体のあちこちから煙が吹き出している。

クラートゥの頭部。目の光も消えてしまった……。

ついにクラートゥは倒れてしまった。奥にはモーロックの列車砲。

モーロックVSユード Chapter 18

ユードは列車砲のモーロックに飛びつき、仮面をはがす。その下からみにくい素顔が現れた。そのすきにティアを助けるユード。怒ったモーロックは、誤って大砲を撃ってしまう。崩れ落ちるドームの天井。あわやガレキの下敷き、と思われたときティアとユードを救ったのは、クラートゥだった。クラートゥはティアに兄の水晶を手渡した……。

「やっと、くたばったか……」砲座のモーロック。

「クラートゥ!!」たのみのクラートゥも倒れてしまった。

痛がって腕をゆるめた兵士を振りきって、列車砲へ飛びつく。

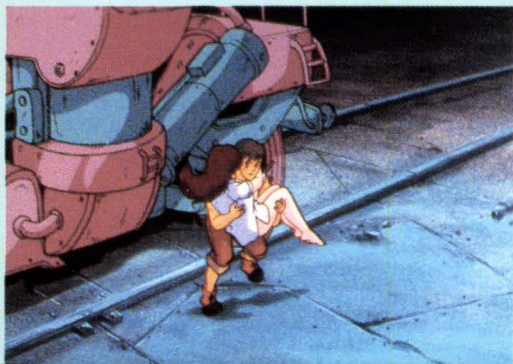
いきなり、兵士の腕にかみつくユード。

モーロックに飛びつくユード。「きさま、何をする!?」

仮面の下のみにくい素顔。とっさに
顔を隠すモーロック。「うっ！」

肘打ちをくらわせるモーロック。ユードの手には仮面が……。

「キャ――ッ!!」モーロックの素顔を見てしまったティア。

モーロックがひるんだすきに、ティアの腕を取って逃げ出すユード。列車砲から飛び降りるふたり。

「お、おのれ。こうなったらふたりとも殺してやるっ!!」怒るモーロック。

クラートゥに駆け寄るふたりを狙うモーロックの大砲。

モーロックの撃った砲弾が、走るふたりの後ろで爆発する。「ズドーン!!」

爆風を受けて、地面に倒れ込むふたり。振動で崩れ落ちる天井。

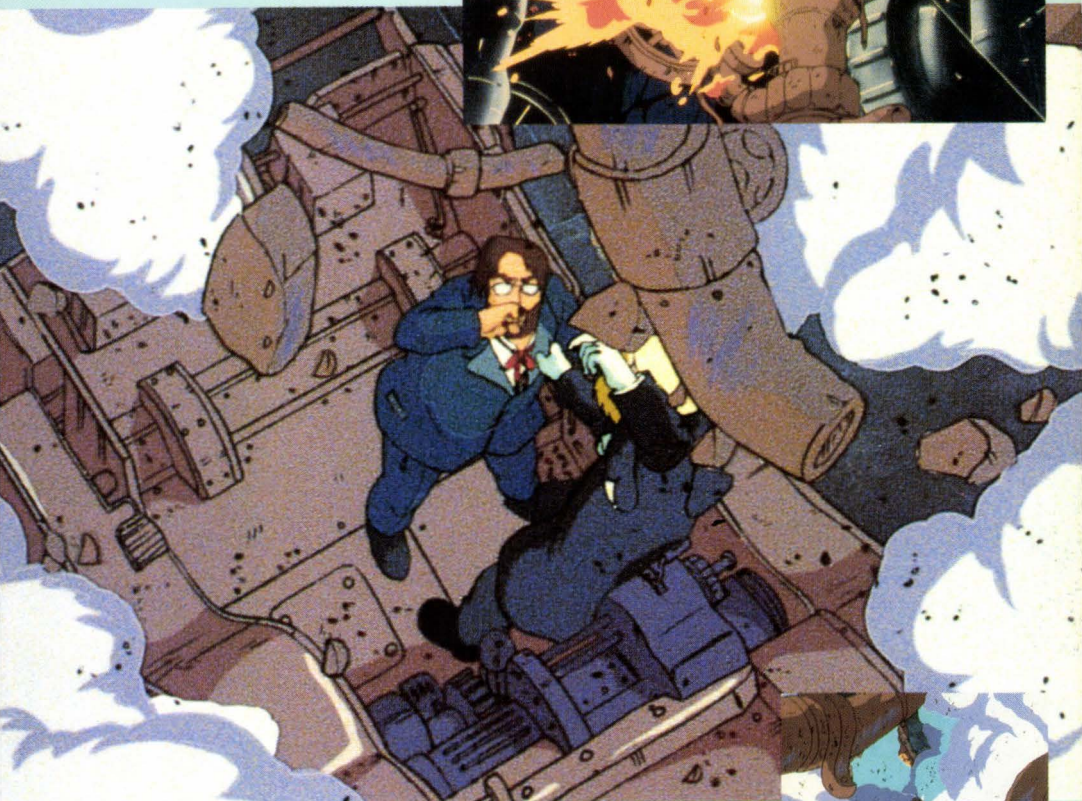
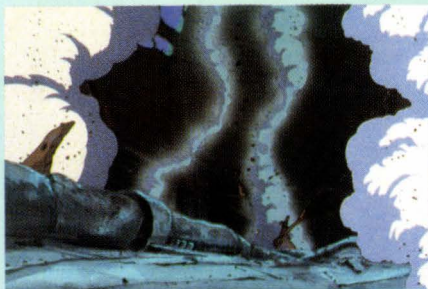
「死ね～つ！」天井が落ちるのもかまわず、狂ったように砲撃する。

「おやめください、モーロック様！　われわれもつぶされてしまいます！」

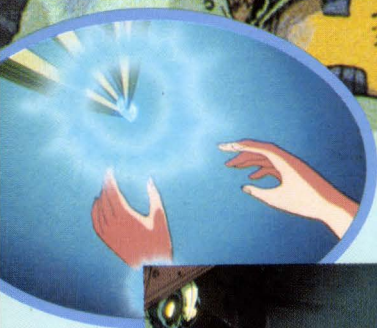
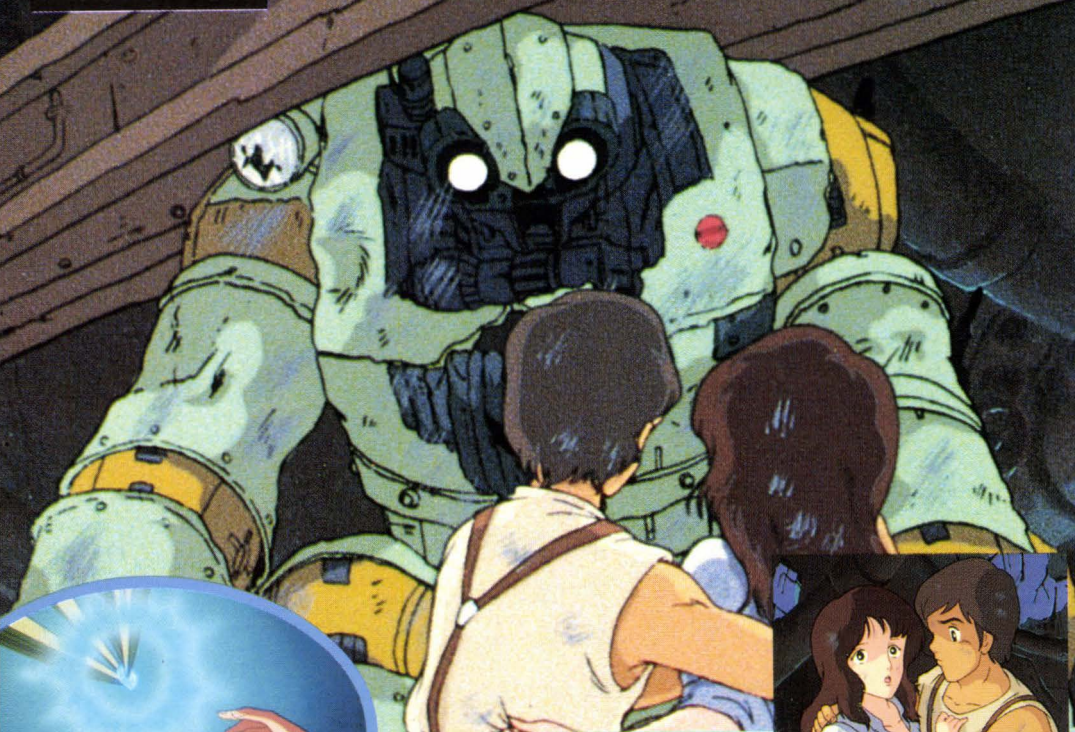
ドーム全体が振動を始める。崩れ落ちる天井や壁錆びた鉄骨も落ちてくる

「放せ、放さんかつ!!」もみあうふたり

誤って発射レバーを押してしまう……。

モーロックが撃った砲弾が天井に命中。
火柱と煙をあげるドームの天井……。

いままでもみ合っていたモーロックとガビシエール、落下物を見て驚く。

砲撃によるドームの崩壊も、どうやらおさまったようだ。舞い上がっていた砂ぼこりもおさまる。

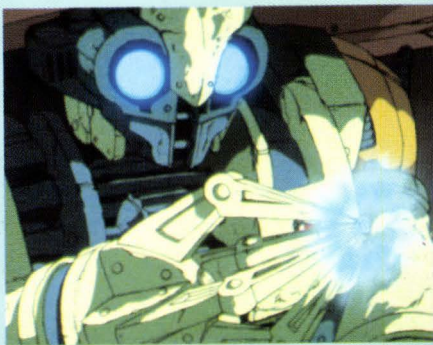
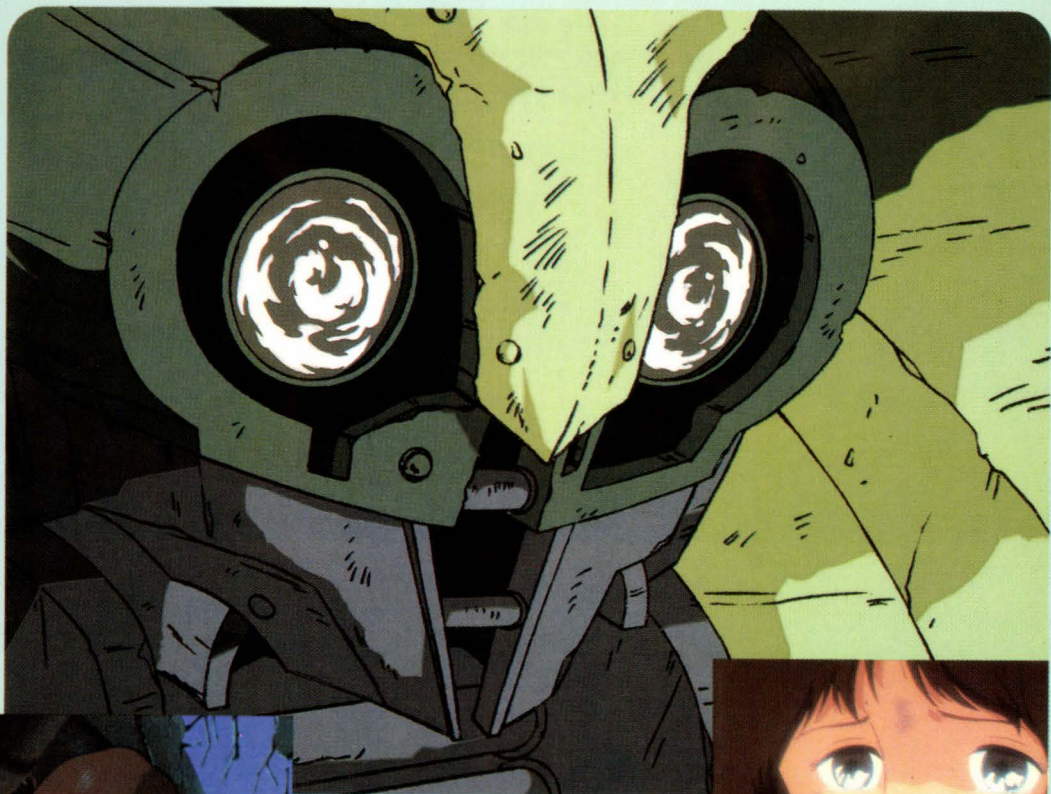
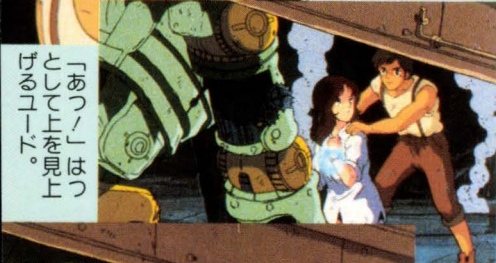
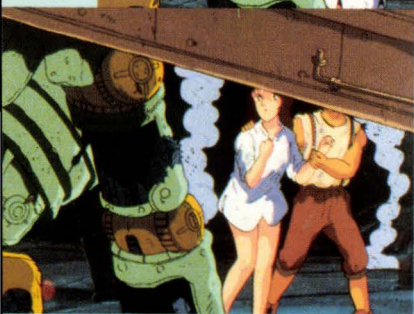
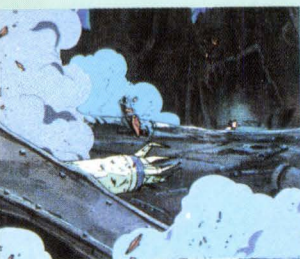
ほこりの中で抱きあうふたり。おそるおそる目を開けると……。

大きな鉄骨を支え、ふたりを救うクラートゥ。

壊れたと思ったクラートゥが…。驚いて見つめるティアとユード。

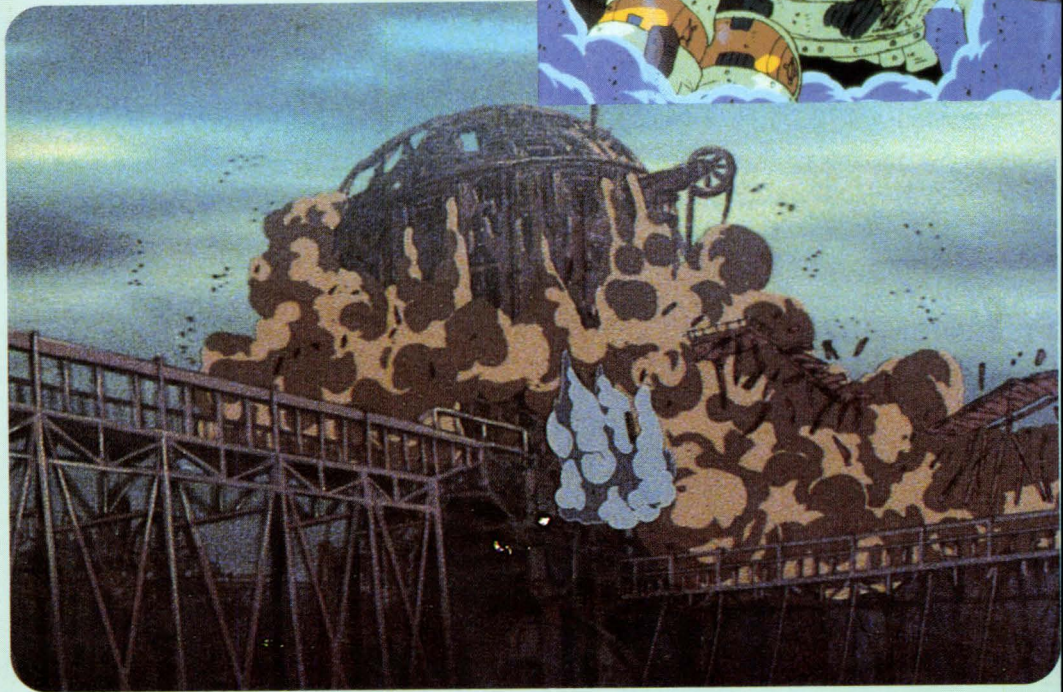
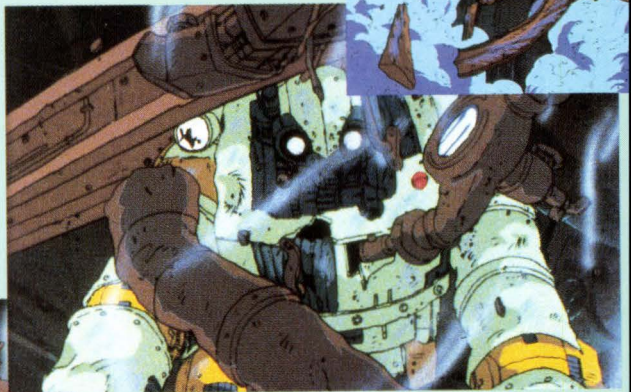
クラートゥの手には、青く輝く水晶石が……。

ふるえながらクラートゥに手をさし出し、石を受け取るティア。ティアの腕輪も青く輝いている。

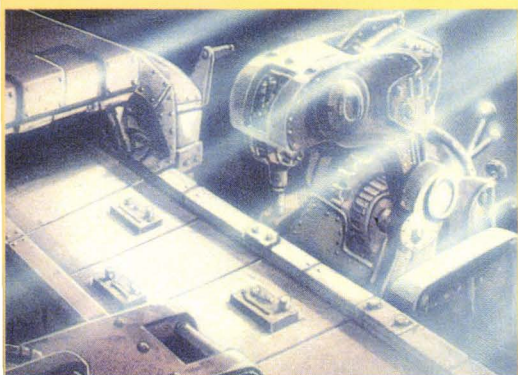
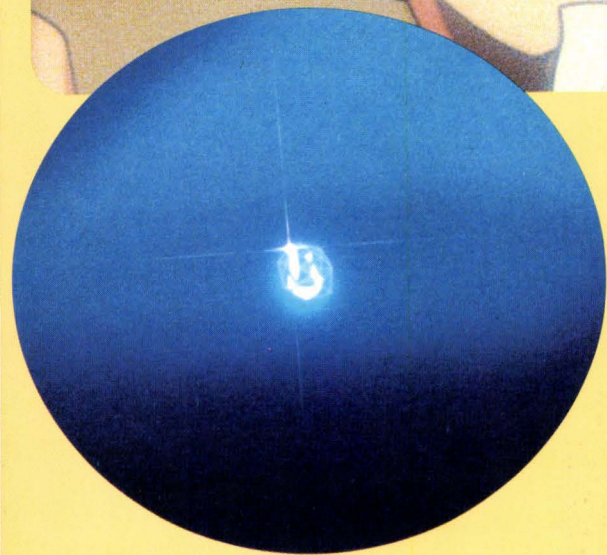
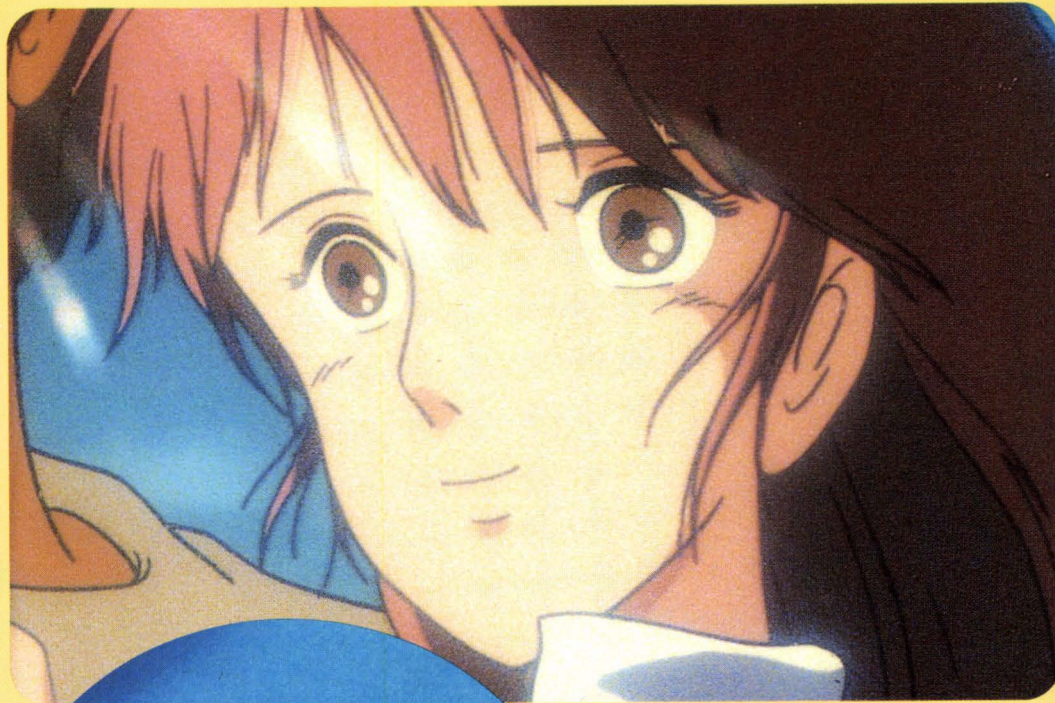
弱々しく青く光るクラートゥの目。涙ぐんでいるかのようだ。

「あっ！」はっとして上を見上げるユード。

「兄さん……」涙ぐんで、つぶやくティア。

ガラガラと音をたて、再びドームが崩れた！

すさまじい勢いで崩れるドーム。クラートゥの右手…。

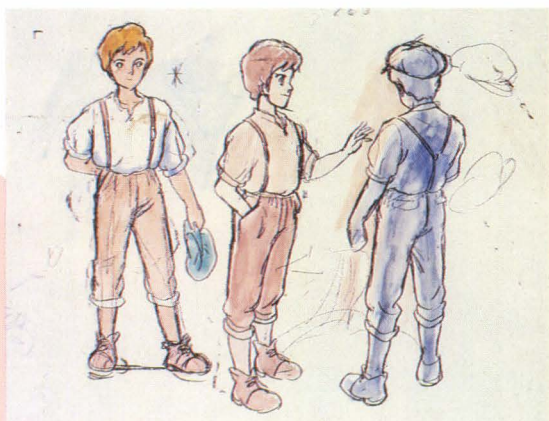
建物全体が見る間に崩れてゆく。モーロックの企みも断たれた……。

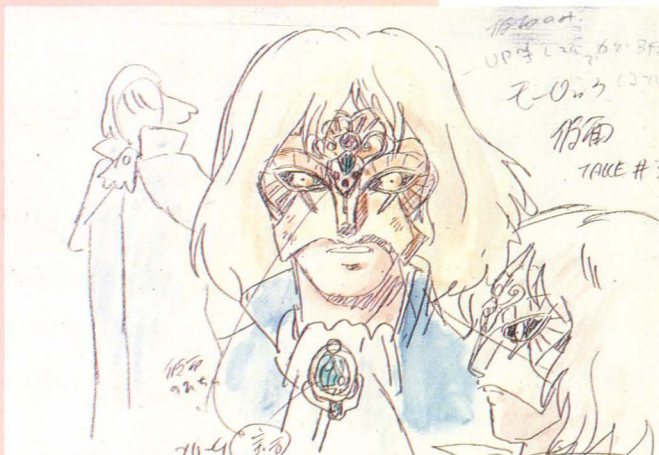
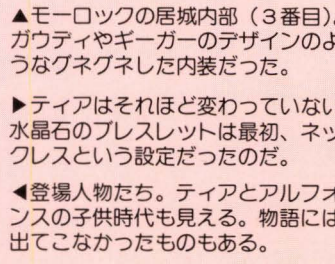
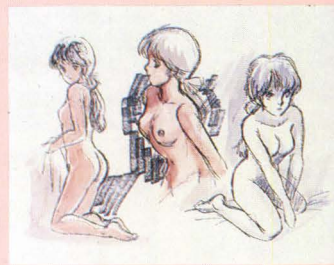
崩れ落ちる鉄骨が非情にも、クラートゥを押しつぶす。

生還 Chapter 19

レジスタンスの仲間の活躍で、バルテュスの工場は破壊された。モーロックの悪事にも、終止符が打たれた。バルテュスの空にも、青空がもどってきた。みんなの顔も、明るく輝いている。明日からは、再び人間らしい生きかたを始めるのだ。死んでいった人たちのためにも……。

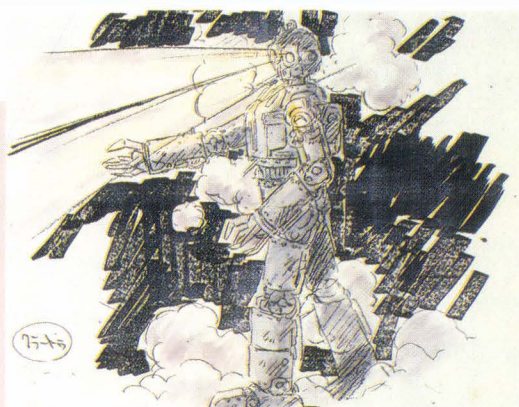
トロッコでドームから逃れてきたふたり。崩れたドームを振り返る。

朝日に照らされるバルテュスの廃墟を見つめる仲間。

カラーイメージボード集

『バルデュス』の世界を構築するカラーイメージボード。初期設定のものもあり興味深い

バルテュスの住宅街（一番上の写真）とルジュテの村の風景。

ユード。ヘアスタイル、服装もいろいろ検討された。ハネてる髪に注目。

初期のモーロックは、醜い小男だったのがわかる（下の写真）。

▲モーロックの居城内部（3番目）。ガウディやギーガーのデザインのようなグネグネした内装だった。

▶ティアはそれほど変わっていない。水晶石のブレスレットは最初、ネックレスという設定だったのだ。

◀登場人物たち。ティアとアルフォンスの子供時代も見える。物語には出てこなかったものもある。

クラートゥの初期設定(下の写真)。
格闘を意識しているのだろうか、
ヨロイの武者のようなスタイル。

工場都市バルテュスからモーロックの居城をのぞむ。不気味にそびえる王の塔。

STORY G・U・I・D・E

ルジュテの美しい浜辺に、ユードという少年が打ち上げられた。彼は、狂王モーロックが支配する工場都市バルテュスから脱出したのだ。そして、介抱してくれた可憐な少女、ティアに出会う。

ユードの傷も癒えたある日、突然巨大飛行船が襲い、ふたりはバルテュスへ連れ去られてしまう。そこでティアは、狂王のベッドに縛りつけられてしまうのだった。

一方ユードは投獄されるが、仲間の手によって脱出。革命の同志たちと打倒モーロックに決起し、ようやくティアを救出する。

しかしそこに立ちはだかるモーロックと兵士たち。ふたりは絶対絶命……。

ユード、ティア、モーロックの初期設定。

バルテュス ティアの輝き

設定集（キャラ）

モノクロ・ページは、バルテュスのメイキング・オブ・キャラクター。30分の作品といっても、これだけの数の案が検討されていたのだ。監督の牧野行洋氏、作画・キャラクターデザインのふるたしょうじ氏のコメントも興味深い。

「このくらいの感じで…」などの書き込みがあちこちに。

ティアの洋服姿。体型のバランス、洋服とのバランスなどの設定。

ティアのヌード。もちろん、ビデオの中にはこんなシーンはない。

モーロックと比べてコドモにならないように、との指示がある。

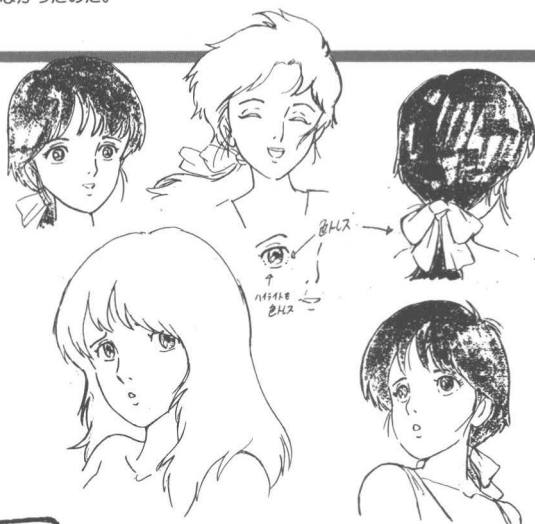
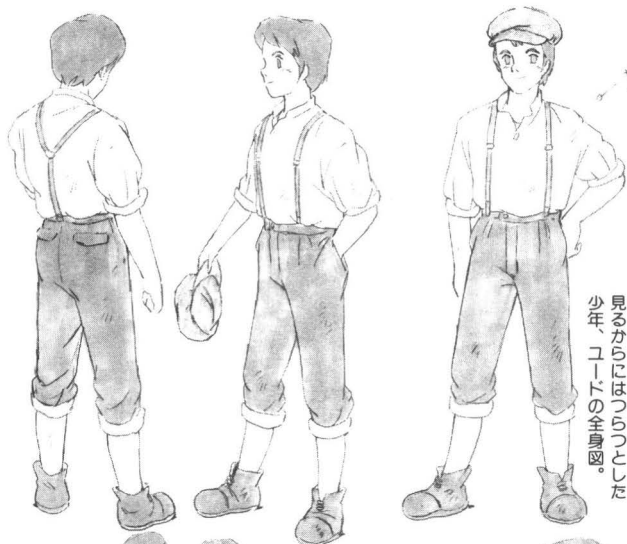
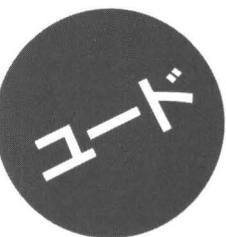
「ティアっていうのは、ごくふつうの自然を愛する少女ですね。ずーっとルジュテで生れて育った素朴な少女っていうかんじ。でも、両親と兄さんがバルテュスの街に出稼ぎに行っちゃって、ひとりで住んでいるんです」（牧野行洋監督）。

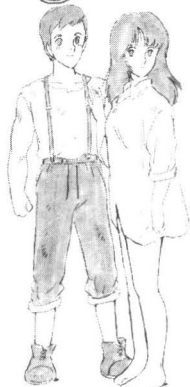
ストーリー後半は、ティアは男物のシャツを着ている。

原画の人が描くために、ティアのシャツの着こなしを細かく指示。

うむむむ。ビデオではこんなにバッチリ見えなかったのだ。

この作品の登場キャラクターのなかで、ほとんど変更がなかったのがストーリーのヒロインであるティア。バルテュスとルジュテの対比を際立たせるキャラクターだ。

「それでも初期設定では、もっと幼なかったんです。だいたい、中学生ぐらい。でも、あんまり幼くするとロリコンっぽくなってアブナイので、16～17歳ぐらいに引き上げたんです。それと、彼女が髪の毛を縛ったパターンというのは、わりと早くから固まっていました。ただ、ユードとティアの逃走シーンなんかは髪が乱れたほうがいいので、ほどいたんです。顔は、ハヤリの絵柄とはちょっと違いますね」と、ふるたしょうじ氏。

「ユードは、機械いじりが好きな元気な少年というイメージです。それで街にあこがれてバルテュスに行って、働いていた。カラーイメージボードの彼の部屋は、彼ら工員たちの寄宿舎なんですよ。塔のふもとにあるんです」（牧野監督）。

見るからにはつらつとした少年、ユードの全身図。

脱出のときのティアとユード。ユードのシャツの汚れに注目。

バストアップにしたときの頭と体のバランス。

「発明や研究の好きな少年がそのまま大きくなった」（牧野監督）というアルフォンス。レジスタンスでは、武器や機械などを作ったり直したりしていたメカニック的な存在だったのだ。

ユードの百面相。これは初期設定なので、ユードの顔はビデオになったものよりも子どもっぽい。12～13歳ぐらいに見えてしまうのだ。わんぱく坊主といった感じ。

モーロック

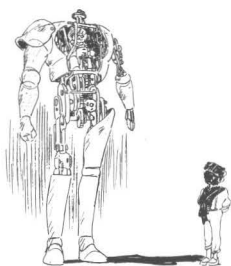
モーロックの衣裳、2タイプ。右はティアを犯したときのもの。

「モーロックっていうのは、今の地位を一代で築いたんではなくて、先代の事業を引き継いたんです。それだけに、階級意識がしみついてしまっている。言うなればエリートですね。顔の傷は、子どものころからのものです」(牧野監督)。

仮面着用時のモーロック。正面とサイド。凹凸がよくわかるのだ。

これがモーロックの初期設定。小指を立てる癖があったのだ。変らないのは髪型だけ。

これは顔全体を覆う仮面。少女鉄仮面伝説みたい。「ヘルメットや義手という案もあった」。

人型の外見。マントを着用している。操作性は悪く、取っ組合いなどはできないらしい。

小男モーロックと彼がふだん乗りこんでいる人型。これで大男に見せるという案。しかし没！

「モーロックは一番最初の設定だと、小男だったんです。〝背が低くて醜い〟というコンプレックスがあって、ふだんは巨大な人型に乗っているというもの。で、背を高くしたので、コンプレックスがなくなっちゃうから、アザを仮面で隠すようにしたんです」(ふるたしょうじ氏)

その他の人物

●イヴェット

●村の子供たち

イヴェットのガーター姿。
なんともなまめかしい。

物語の冒頭に登場した子供たち。実は名前があるのだ。

●レジスタンスたち

全裸でモーロックのお相手を務めていたが、ネグリジェ姿もあった。

「リーダーのシリュグはアルフォンスの親友」(牧野監督)。

●バルテュスの労働民たち

なんとなくみんなディケンズの小説に出てきそうである。

ここでちょっと、時間の関係上作品に描ききれなかった、バルテュスの人々の生活についてお話をうかがってみた。
「バルテュスは工場労働者が住むために生れた街で、ルジュテの村からの出稼ぎの人で成り立っているんです。人々の居住区は塔のまわりにあ

●娼婦と男

ユードの回想シーンの中に登場した娼婦と男。

●モーロックの部下

レルフとは、ユードと牢の扉越しにしゃべっていた人。ガビシェールは他より格が上だ。

●バルテュス兵

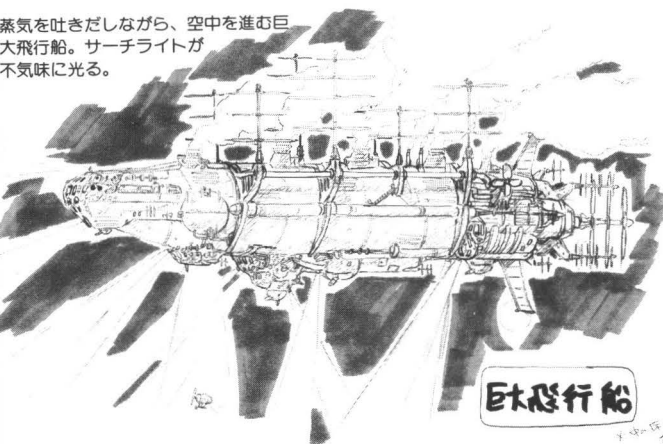
彼らはモーロックにやとわれた武装した私兵らしい。

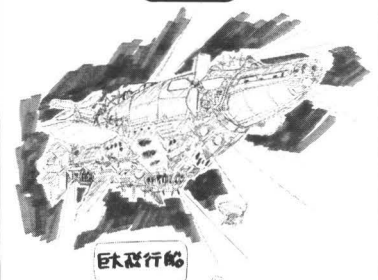
●クラートゥ

ガラクタを寄せ集めたようなクラートゥ。

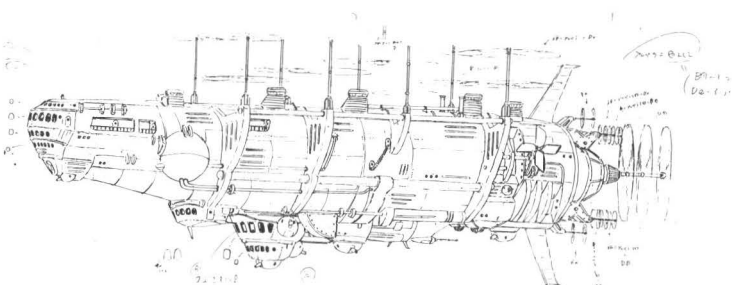
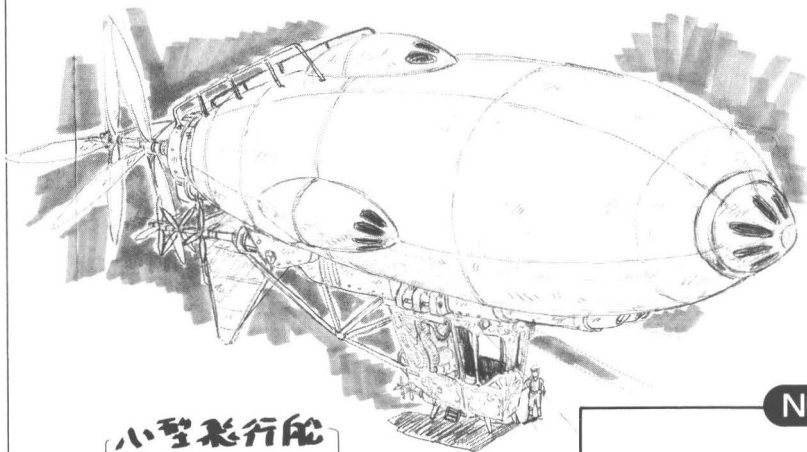
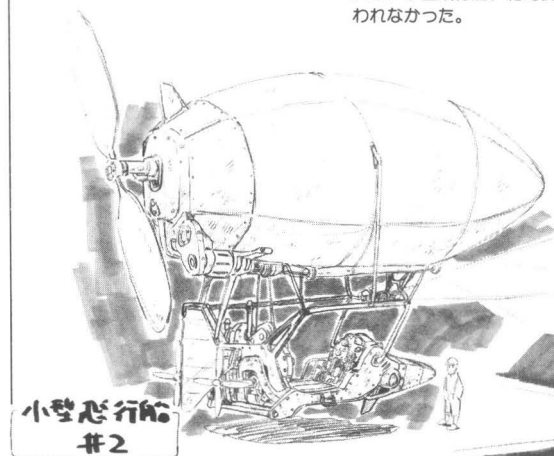
って、モーロックの部下たちは塔の中に住んでいます。そこには、はっきりと階級がある。また、ユードたち若者もあこがれて街にやってきて寄宿生活をしながら働いています。でも、快楽を与えられたり、モーロックの私兵が警戒しているので、逃げられないんです」(牧野監督)。

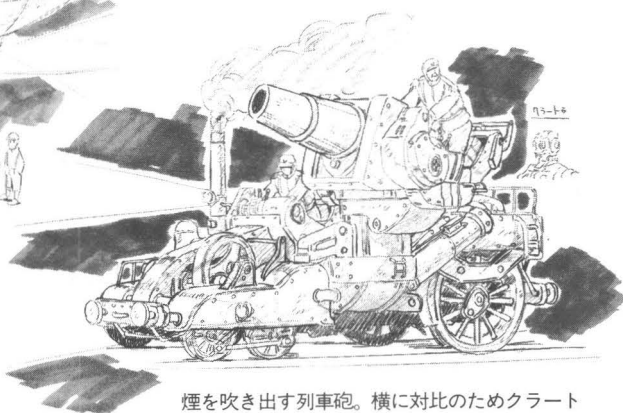
ノた「バルテュス」

蒸気を吐きだしながら、空中を進む巨大飛行船。サーチライトが不気味に光る。

30分という時間とはいえ、絵コンテ、原画、作画など通常のアニメと同じ手間をかけてバルテュスは製作されている。ここで紹介している"NG"などは絵コンテ前のもの。その時点から、この作品のために何枚ものイラストが描かれてゆくのだ。

NG1

これは絵コンテが仕上る前に描かれた巨大飛行船。深海用潜水艇のようである。

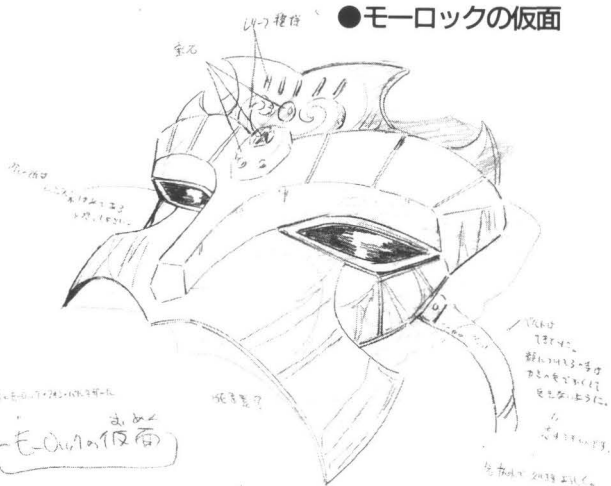
「ストーリーが30分におさまらなくてコンテ段階で縮めたんです。ユードとティアが逃げるシーンは最初、もう少し長かったんです」(牧野監督)。トロッコに乗ったふたり。

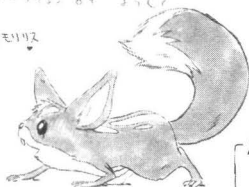
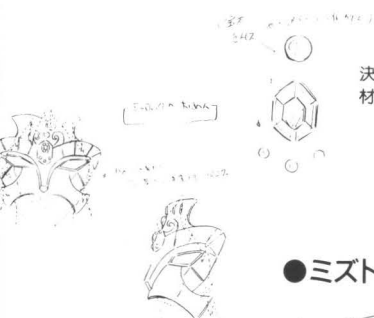
「メカと飛行船の原型を考えたのは牧野くんです。それを僕が手直しするかたちで仕上げていきました。なるべく宮崎(駿)さんによくあるパターンにならないように、いろいろ苦労しましたね」
と語るのは、ふるたしょうじ氏。

壮大なる構想のもとにスタート

下の＃２よりはひとまわり大きい小型飛行船。結局使われなかった。

ユードとティアをとらえるため、巨大飛行船から発進するという設定で描かれたもの。サカナのようなスタイルだ。

モーロックの寝室にユードが突入したときのもの。１人乗り。

煙を吹き出す列車砲。横に対比のためクラートゥが描かれている。「最初は列車砲ではなくて、敵もロボットで対抗してくる予定だったんですよ」（牧野監督）。

小物 ETC.

たかが小物と思うなかれ。なにげなく見落としてしまいそうなものでもひとつひとつ細ごまと、ていねいに設定されているのだ。

「モーロックの仮面も、質感や形を変えて2～3パターンぐらい検討しました」(ふるたしょうじ氏)。

●モーロックの仮面

決してUPにはならない部分も材質や凹凸などの設定がある。

●村の動物たち

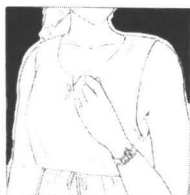
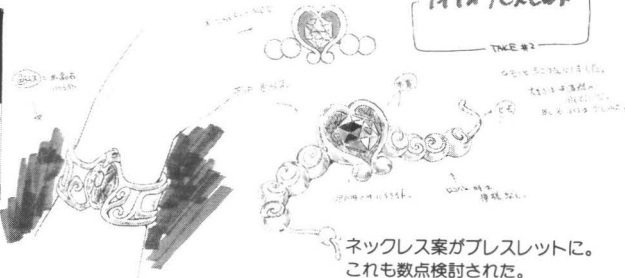
●ミズトリ

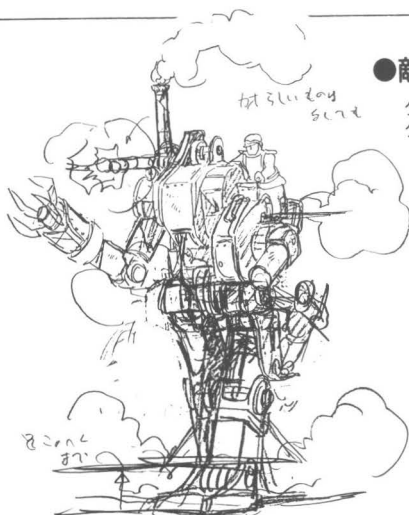
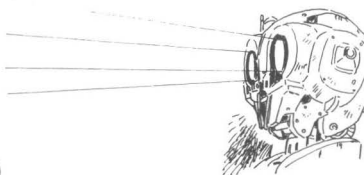
オープニングに登場するミズトリ。足も描いてある。

トビヨロイウサギなどネーミングがかわいい。

●モーロックのグラス

決定稿のものは模様の位置が若干下がっているようだ。

●ティアのブレスレット

ネックレス案がブレスレットに。これも数点検討された。

クラートゥの秘密集

「クラートゥっていうのはガラクタを集めて作ったロボットで、最初お兄さんの魂が乗り移って動くわけがないものが動く、というイメージだったんです。あとモーロック側もロボットで対抗しての格闘シーンもあったんですよ。でも世の中ロボット物ばかりなので、列車砲を出すことにしたんです」(牧野監督)。

●敵のロボット(初期設定)

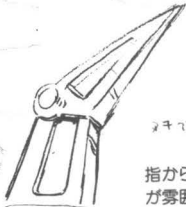
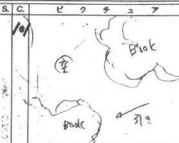
クラートゥと戦うはずだったモーロック側のロボット。煙突がかわいい。

●クラートゥ 頭部

テレビを後ろから見たような、クラートゥの後頭部。ネジ止めか?

●クラートゥ(初期設定)

初期は手の指も5本あって今風。モビルスーツ・タイプだった。

●クラートゥ 腕

指からツメに。ネジ(リベット?)止めが雰囲気を出している(鉄人みたい)。

「チラとティアを見るユード」(103)に続く104はユードから見た図。足から胸、顔と、視線を移動させているのを表現している。また近づいた飛行船は常に画面の半分近くを占めていることに注意。これで飛行船の"巨大さ"を見せているのだ。

209はモーロックがティアの身体をなめるように見る場面。これもモーロックの視点だ。大きく描かれカメラを移動させる。また222や225など、絵コンテの状態とは仕上がりが違っている場面もある。どこが違うかビデオを見てみよう。

S.	C.	ピクチュア	内容	セリフ	メモ	秒数
	235		モーロック ニヤッと笑い 腰をグイッと 押しつける			2+18
	236		のけぞる ティア	ティア 「ああっ」		
				ああ〜〜〜っ!!」		3+0
	237		赤っぽく 光る 水晶石 F.I			2+12
居住区地下	238		反応する クラートらの目 同じ色に 光り出す。 (F.I) まっくら			2+12

S.	C.	ピクチュア	内容	セリフ	メモ	秒数
	225		愛撫しつづける モーロックの手			
			少しずつ 広げていく ティアの足		フラトレス	4+12
	226		右手を抜く モーロック (指先に光る愛液 (ティアの下着 まくれてしまっている) A.C			3+12
	227		その手を ティアの口へ A.C	(C215 同ポジ)		3+0
	228		指をつっこまれ 首を振って 抵抗する ティア			5+0
	229		抜いた指先 にからむティアの 愛液と唾液			5+0
	230		体を起こす モーロック ゴヤリとして	(C210 兼用)		3+0
	231		ティアの下着を 脱がして脚を 開かせて 秘部に目をやる 脚を閉じようと するティア			4+0
	232		しかし、グッと 広げられて 顔をそむける			

ユードとティアの逃避行

ストーリー中、最もスピード感あふれるシーンだ。助けようとしたユードもろとも落下してしまうティアア〜巨大な穴に落ち込み〜排水口から水といっしょに吐きだされ〜また落下。ここまでが、息をつかせないほどのスピード感で描かれている。

クラートゥ発動

S.C.
ピクチュア
内容
セリフ
メモ
秒数
再び砲撃
(ズドーン!)
0+18
(アオリ)
(ズガーン!)
ズガーン!
4+18
2+12
7+12
3+0
3+0
P.U
5+0
3+0
3+0

クラートゥは鉄のカタマリだ。鉄でできたものは、軽々しく動かない。このシーンで表現されるのは、クラートゥの重量感だ。壁を突き破ってもクラートゥは、すぐには入ってこない。一歩一歩、床をふみしめながら近づいてくる…。

クラートゥ〜生還

S.C.	内容	セリフ	メモ	秒数
369(つづき)	ふるえながら手をさしだすティア。 青く光る腕輪の中の石			5+0
370	→PAN		石をうけとり見てから クラートゥの方に 手元で腕をもどすティア →PAN ティア「これは……」	8+0
371	弱々しく青く光るクラートゥの眼。(消えていくかのように)	SE (クラートゥの稼動音 だんだん小さくなる)		4+12
372	涙ぐみ、つぶやくティア。	ティア「[illegible]……」		5+18

S.C.	内容	セリフ	メモ	秒数
374	ハッと見るユード ・ カット尻立ち上り (c364 同ポジ)	ユード「あっ!」		2+12
375	クラートゥなめ・ ユード ティアの肩を抱き	ユード「ティア、ここは危ない! 逃げるんだ!!」		
	二人走り出す (ティア クラートゥに 視線残しつつ) 泣いている			4+18
376	崩れ落ちる天井	(c373 同ポジ)		2+12
377	押しつぶされてしまうクラートゥ	(c365 同ポジ)		4+0

S.C.	内容	セリフ	メモ	秒数
363(つづき)	抱き合っているティアとユード (ホコリをかぶっている)			
	目を開き、ハッとして前を見るユード			
	つづいて目を開くティア			9+12
365	大きな鉄骨を支えて二人を救ったクラートゥ (サーチライトは消している) (ティア、ユードなめ)			3+0
366	驚き顔でみつめる二人 ティアそのままで	ティア「ああ……」		

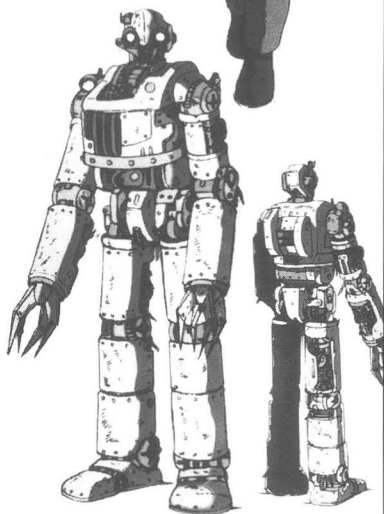
「ＥＴ」にも似た人間と無機物（機械）との交感が描かれる。それまで機械のすぎなかったクラートゥが目（光球）の輝きと陰影の変化で魂が吹き込まれるのだ。ラストは、廃墟にさす“朝日＝新しい体制の誕生”が象徴的に使われている。

バルテュスの物語を語る人びと

CREDIT

制作スタッフ

●

監督
牧野行洋
作画監督
ふるたしょうじ
キャラクターデザイン
ふるたしょうじ
デザイン協力
牧野行洋
作画
片野　紫
渡辺螢子
樹村枝里子
富田靖夫
美術
海老沢一男
色指定
秋山季映
撮影
三晃プロダクション
アニメーション製作
草間アート
アニメーション総指揮
草間真之介
プロデューサー
丸山　新
制作進行
石田　一
制作デスク
谷　邦夫
スチール協力
萩原　功
キャスト
ティア
高田由美
ユード
関　俊彦
モーロック
玄田哲章
企画・制作
フレンズ

英知ロマン・アニメ・シリーズ

1988年7月30日　初版発行　定価800円

発行人●日暮哲也

発　行●英知出版株式会社

〒160　東京都新宿区愛住町13-10

曙橋KIビル

TEL　03-356-4431(代)

ＦＡＸ　03-356-2474

振　替　東京8-130860

編　集●スリーウェイブ

デザイン●安藤　司

印刷所●大日本印刷(株)

1988　Printed in Japan

ISBN 4-7542-1309-2　C0072